

教育テレビ60年 学校放送番組の変遷

メディア研究部 宇治橋 祐之

要約

1959年1月、日本初の教育専門局として開局したNHK東京教育テレビジョンは、2019年1月で60年を迎える。その開局時に最も長い放送時間を占めたのが学校放送番組である。

本稿では教育テレビ60年の歴史の中での学校放送番組の変遷を、およそ20年ごとに3つの時代に分け、「社会状況・教育政策」「放送技術・メディア環境」「番組編成」「番組内容（構成・演出）」「番組利用・番組研究」の5つの視点で分析する。

第1期にあたる1959年から70年代の約20年は、テレビ学校放送番組の拡大期である。

映像の特性を生かしてどんな教育番組が放送できるのか、テレビ学校放送番組の開始にあたってさまざまな試みが行われた。この時期の学習指導要領で「系統性」が重視されたこともあり、学校放送番組も各学年、教科への対応が進められ、放送時間も拡大していった。放送番組の利用研究が進むとともに、利用方法の論争も生まれた。

第2期にあたる1980年代から90年代は、放送教育の隆盛と転機の時代といえる。

1980年代になるとVTRが広く一般に普及していく。番組制作ではVTRロケが容易になり、家庭よりVTR普及が早かった学校現場では録画利用が可能になったことで、番組の利用率も増えていった。一方で、市販ビデオの普及、学校へのコンピューター導入などが進められ、「ナマ、丸ごと、継続」という放送教育の考え方も転機を迎える。

第3期にあたる2000年以後は、放送とインターネットの連動期になる。

2000年代はデジタル化により高画質の番組と、データ放送で付加情報が送れるようになった。さらにインターネットとの連動により、放送番組だけでなく動画クリップの提供も可能となった。学習指導要領も「総合的な学習の時間」の導入など多様化する中、テレビ学校放送番組も放送回数や番組時間数を柔軟に編成するようになり、演出も「オープンエンド」や「セグメント」などさまざまな手法がとられるようになる。従来の放送教育に加え、視聴覚教育、情報教育も含めたメディア教育としての研究が広がってきている。

総合的にテレビ学校放送番組の歴史を記述することで、今後の教育メディアの方向性を考える。

目次

はじめに：3時代・5視点で読み解く教育テレビと学校放送番組の60年……………	132	Ⅲ-3 学校種対応の編成、録画利用への対応	
I 教育テレビ開局までの学校放送番組……………	136	Ⅲ-4 総合学習番組への取り組みと特別シリーズ	
I-1 ラジオ学校放送番組の始まり		Ⅲ-5 視聴能力に関する研究とメディア・ミックス利用の始まり	
I-2 テレビ学校放送番組の始まり		Ⅲ-6 小括 <コラム マルチメディア教材『人と森林』>	
II テレビ学校放送の拡大期（1959～70年代）…	140	IV 放送とインターネットとの連動（2000年以後）…	168
II-1 「教育の系統性」重視の時代		IV-1 「生きる力」と「社会に開かれた教育課程」	
II-2 テレビ放送の広がりカラー化		IV-2 放送のデジタル化とネット連動	
II-3 放送時間の拡大と各学年・教科への対応		IV-3 放送回数、番組時間数の柔軟化	
II-4 映像で何を伝えられるかの模索		IV-4 「オープンエンド」「セグメント」の進展	
II-5 放送教育研究の全国展開と「ナマ、丸ごと、継続」論		IV-5 情報教育、視聴覚教育と放送教育	
II-6 小括 <コラム『山の分校の記録』>		IV-6 小括 <コラム デジタル教材『おこめ』>	
III 放送教育の隆盛と転機（1980～90年代）…	154	V 考察：61年目からの教育テレビと学校放送番組に向けて……………	182
III-1 「ゆとり教育、個性化教育」への取り組み		おわりに……………	183
III-2 テレビの高画質化とVTRの普及		付表……………	188

はじめに

3時代・5視点で読み解く 教育テレビと学校放送番組の60年

1959（昭和34）年1月10日、日本で最初の教育専門テレビジョン放送局としてNHK東京教育テレビジョンが開局した。開局は当初東京と大阪だけであったが、仙台・広島（1960年度）、名古屋（1961年度）、札幌・松山・福岡・熊本（1962年度）と開局が続き、1964年4月には全国の90%以上の地域で教育テレビの受信が可能になった。

教育テレビ開局時、最も多くの放送時間を占めていたのは学校放送番組である。

教育専門局は免許条件として、一般の総合番組局より多い「教育番組75%以上・教養番組15%以上」の番組編成を義務づけられている¹⁾。また教育番組は放送法で、「対象とする者が明確」「内容がその者に有益適切」「組織的かつ継続的」、そして「放送の計画及び内容をあらかじめ公衆が知ることができるようにしなければならない」と定められ、他の放送番組より厳格な基準が示されている²⁾。そしてNHKでは、放送法に示された項目と合わせて、国内番組基準で「放送を通じて、教育の機会均等のために努力する」としている。

学校放送番組は教育番組の一分野であるので、上記をもとに制作される。NHKの国内番組基準には学校放送番組について、「放送でなくては与えられない学習効果をあげる」とするほかに、「各学年の生徒の学習態度や心身の発達段階に必ず」という視聴対象に対する配慮が示され、さらに「教師の学習指導法などの改善・向上に寄与する」として、視聴対象を子どもだけではなく、教師まで含むものととらえた項

小学校でのテレビ学校放送視聴（1950年代）



目が示されている³⁾。

学校放送番組は、写真で示すような教師と子どもがいる教室を主な対象として、放送法や番組基準で示される教育目的を果たすために、放送を続けているのである。

教育テレビでの学校放送番組の放送時間数は1970年代までは増加、1980～90年代に転換期を迎え、2000年代以後は、放送時間は減少するものの、インターネット展開を積極的に進めてきた（表1）。

本稿では教育テレビ60年における学校放送番組の変遷をおよそ20年ごとの3つの時代に分け、図1に示す5つの観点で分析する。学校放送番組の対象には、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校があるが、本稿では小学校向け番組を中心に中学校・高校向け番組を扱う⁴⁾。

また記述にあたっては、これまでの周年ごとに書かれた論文などを中心に、教育テレビ開局時から制作にあたってきたディレクターや番組を利用してきた教師へのインタビュー、『NHK学校放送テキスト』や全国の放送教育研究会の研究報告などを参照した。

放送番組は番組制作者の企画により制作が始まるが、その企画の前提として、その時々の

社会状況が大きく関わる。メディアは社会を映す鏡であるためである。

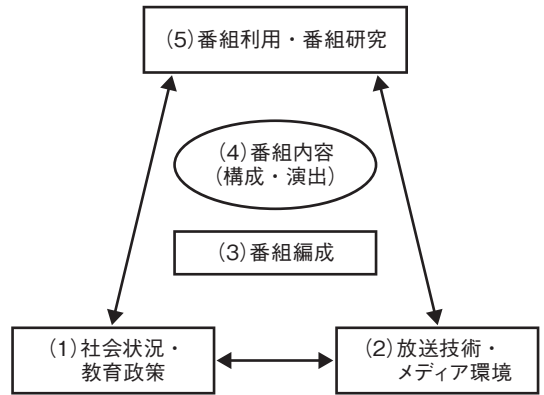
そのため第1の視点として、それぞれの時代の「社会状況・教育政策」をみる。学校放送番組はおよそ10年に一度改訂される「学習指導要領」⁵⁾との関わりが深い。放送法でも「当該番組が学校向けのものであるときは、その内容が学校教育に関する法令の定める教育課程の基準に準拠するようにしなければならない」と定められている。

その一方で、学習指導要領に示されている内容をどのように取り上げて番組として放送するのかの判断と責任は、政府から独立した公共放送のNHKにあることも重要である。

この60年間の教育政策と学習指導要領の変遷の大きな流れをみると、1950～70年代は「系統性重視」「現代化カリキュラム」がキーワードになる。

この社会的背景の大きな要因の一つとして、ソ連が1957年に人工衛星スプートニク1号を打ち上げたことでアメリカに起こった「スプートニク・ショック」がある。ソ連に対抗するためにアメリカで学校教育の充実、科学技術の発展が目指され、日本もその影響を受けた。その結果として基礎的、科学的知識の「系統的な学習」を

図1 教育テレビ60年を読み解く5つの視点



重視し、時代の進展に対応した教育内容を導入する「教育内容の現代化」が進められていった。

続く1980年代は、過密な「現代カリキュラム」による学習についていけない子どもが増えた反省から、ゆとり教育の方向が示される。1990年代になると学校週5日制も始まり、学習内容の削減が進められた。また学校教育だけでなく、生涯学習の重要性が示されるとともに、個性を生かす教育「新学力観」が示された。

この方向は2000年代にも引き継がれ、「総合的な学習の時間」が誕生する。詰め込み教育でもゆとりでもない、脱ゆとりの動きの中、「社会

表1 学校放送番組の放送時間数の推移（教育テレビ、1週間あたり、定時番組）

	1960年度	1970	1980	1990	2000	2010
幼稚園・保育所向け	1時間45分	4時間15分	4時間15分	4時間30分	3時間00分	2時間30分
小学校向け	6時間25分	12時間40分	17時間00分	18時間15分	13時間00分	7時間40分
中学校・高等学校向け	5時間00分	17時間00分	7時間40分	5時間00分	2時間30分	1時間00分
計	13時間10分	33時間55分	28時間55分	27時間45分	18時間30分	11時間10分

注1：当該年度の『NHK学校放送テキスト』『NHKポケット事典』『NHK年鑑』をもとに作成

注2：放送時間は再放送を含む

注3：中学校・高等学校向けは、中学校向け、高等学校向けも含む

に開かれた教育課程」としての学校教育の方向性が示されている。

こうした時代状況と合わせて番組制作を規定する大きな要因として、「**放送技術・メディア環境**」を第2の視点とする。

教育テレビ開局時の番組は白黒の生放送であったが、ほどなくカラー化が進められていった。続く80年代にVTR化が進められたことと合わせて、番組制作の自由度が高まっていった。一方でVTR化は視聴者が録画した番組を必要ときに必要な部分だけを見ることも可能にしたことで、番組編成や番組制作のあり方にも大きな影響を及ぼしていく。

2000年代以後はデジタル化の進展で、高画質の映像とデータ放送などの付加情報を放送できるようになる。さらにインターネットとの連動が技術的に容易になり、放送した番組をインターネットで配信し、テキストとして提供していた番組関連情報をウェブサイトで提供することも可能になっていった。

学校放送番組も2001年度からは「NHKデジタル教材」、2011年度からは「NHK for School」としてウェブサイトを展開、2018年度時点で2,000本以上の番組、7,000本以上の動画クリップと、子どもたち向けの関連教材、先生向けの授業プランやワークシートを公開している。

こうした社会的背景、技術的要因などをもとに、教育テレビの番組は編成される。この「**番組編成**」を第3の視点とする。

教育テレビ開局から70年代までは、学校放送番組の放送本数、放送総時間数は拡大していく。小学校、中学校、高校の各教科に対応した年間35～40本をまとまりとする番組シリーズが、授業で利用しやすい平日の午前中と午後の早い時間帯に編成された。しかし80年代になると中学校・高校向け番組は、録画利用が主流となっ

たことや、さまざまなVTR教材が利用されるようになったこともあり、放送枠が減少。教育テレビ全体としても、生涯学習時代のニーズに応えるべく、家庭で視聴する幼児向け番組や、各種講座などの生涯学習番組が増え、相対的に学校放送番組の放送時間は減少、1シリーズ35～40本の編成から20本を基本編成とするようになる。

2000年代以後は、インターネットでの番組配信の進展もあいまって、番組の放送時間を10～15分サイズにすることを基本として、シリーズ総本数も20本を基本としつつ、5本編成や10本編成など、柔軟な編成となり、中学・高校向け番組は録画しやすい深夜の時間帯に編成されていった。

こうした番組編成の中、本論文の中心となるのが各時代の「**番組内容（構成・演出）**」をみる第4の視点である。

テレビ学校放送の開始当初は、各学年の子どもたちの発達段階に合わせてどのように先生役やキャラクターを設定して、どのようなストーリー構成にすればよいのかの模索が続く。その一つの表れとして、「**教室番組**」と呼ばれる、子どもたちが集団でいる教室という場に向けて、系統的に学習が進められるような番組制作が行われる。

80年代になると、こうした「**教室番組**」の手法も残しつつ、放送の総合性を生かした複数学年対象の教科以外の番組や、安全教育、環境教育など喫緊の課題を扱う教科以外の番組制作も盛んになっていく。この方向性は2000年代以後も継続し、メディア・リテラシー教育、いじめへの対応、主権者教育や消費者教育など、学習指導要領で明確に教科等に位置づけられていないが、これからの社会を生きていくうえで必要と考えられる内容の番組が増えていく。

番組のスタイルも放送初期からある「オープンエンド」で疑問を投げかけるタイプの番組がさらに発展するとともに、「セグメント」単位で視聴することも意識した番組など、多様な演出形式の番組が登場してきている。

こうした番組を視聴者である教師や子どもたちがどのように見てきたか、どのように番組利用研究が進められたか、「番組利用・番組研究」の歴史をみるのが**第5の視点**である。教育テレビ開局を機として番組利用が広がり、放送教育研究の全国的な組織が誕生する。そこでは番組利用をめぐるいくつかの論争が起きた。1980年代以後は教室にコンピューターをはじめとする機器が入り、インターネットに接続することでいつでも必要な情報が取り出せる時代となり、放送番組をどのように授業で利用することが効果的なのか、情報教育も含めたメディア教育の中で利用研究が進む。

以上の5つの視点を3つの時代に整理したの

が**表2**である。第1期は高度経済成長時代のもと、学習指導要領が「系統性重視」「現代化カリキュラム」を目指す中、テレビの普及とともに進む学校放送番組の拡大期である。1980～1990年代の第2期は、改革の時代の中で「新学力観」が示され、VTRが普及していく中での学校放送番組の隆盛と転機の時代である。そして2000年代以後の第3期はグローバル化が進み、放送のデジタル化、インターネットの普及が進む中での学校放送番組とインターネットの連動の時代である。

本稿では、第I章で教育テレビ60年の前史としてラジオ時代、教育テレビ開局前のテレビ時代の概略をみたとうえで、第II章から第IV章では、表2に示す第1期から第3期について5つの視点で節を設け、最後に小括とその時代の番組についてのコラムを置き、第V章で考察を行った。教育テレビ60年の歴史の中での学校放送番組の変遷を多様な視点でみていきたい。

表2 5つの視点でみる教育テレビ・学校放送番組60年の3区分

	第1期 1959年～	第2期 1980年～	第3期 2000年～
(1) 社会状況・教育政策 (学習指導要領)	<ul style="list-style-type: none"> 高度経済成長の時代 1961年「系統性重視」 1971年「現代化カリキュラム」 	<ul style="list-style-type: none"> 改革の時代 1980年「第一次ゆとり」 1992年「新学力観」 	<ul style="list-style-type: none"> グローバル化 2002年「生きる力、総合」 2011年「脱ゆとり」
(2) 放送技術・ メディア環境	<ul style="list-style-type: none"> 白黒テレビの普及 カラーテレビ放送の開始 	<ul style="list-style-type: none"> VTRの普及（Vロケ、録画利用） 高画質テレビ（ハイビジョン） 	<ul style="list-style-type: none"> デジタル化、データ放送 インターネットとの連動
(3) 番組編成	<ul style="list-style-type: none"> 放送時間数の拡大 各学年・教科への対応 	<ul style="list-style-type: none"> 生涯学習波としての教育テレビ 録画利用への対応 	<ul style="list-style-type: none"> 放送回数、番組時間数の柔軟化（10分化、5～10本編成）
(4) 番組内容 (構成・演出)	<ul style="list-style-type: none"> 教室番組の進展 教科ごとの番組特性 	<ul style="list-style-type: none"> 教科以外の番組への広がり 中高特別シリーズの開始 	<ul style="list-style-type: none"> オープンエンド セグメント
(5) 番組利用・番組研究	<ul style="list-style-type: none"> 放送教育研究の広がり 番組利用をめぐる論争 	<ul style="list-style-type: none"> 映像視聴能力の研究 メディア・ミックス利用 	<ul style="list-style-type: none"> 番組と動画クリップの活用 情報教育などへの広がり



教育テレビ開局までの学校放送番組

日本の放送は1925年3月22日、社団法人東京放送局（JOAK）のラジオ放送開始から始まる。放送開始にあたり、東京放送局総裁の後藤新平は、放送の目的と役割として、「文化の機会均等」「家庭生活の革新」「教育の社会化」「経済機能の敏活」の4点を挙げた。

目的の一つに教育が挙げられたが、当初の放送は語学講座⁶や教養番組で、学校で子どもたちが集団聴取する学校放送はなかった。

1931年4月6日からは第2放送（当初は二重放送と呼ばれた）が開始される。第2放送は初めから教育放送を行うことを目的としており、「中學程度の一般教育および實業教育に必須の學科その他主として教育放送のため」と日本放送協会（以後、NHKと表記）が通信省に提出した認可申請書に明記されている。

しかし、放送の主管庁である通信省と教育の主管庁である文部省の監督権限の対立から、NHKでは「教育放送」や「学校」という言葉を使うのを避け、「教養放送とスポーツ中継」を標語として放送が始まった。

I-1 ラジオ学校放送番組の始まり

文部省はNHKによるラジオ学校放送に批判的であったが、NHKでは段階的に学校放送番組を始めていく。

1931年夏、東京中央放送局は、朝のラジオ体操を普及させるために、東京市内の小学校にラジオ受信機を配布した。その受信機をそのまま学校に置き、同年9月から学校向け番組の放送を試験的に行った⁷。

1933年9月には大阪中央放送局で西本三^みと^と二^じ⁸を中心として、ラジオ第2放送のローカル放

送として、月曜日から金曜日の午後2時から2時半まで『学校課外講座 尋常小学校2年～6年向け』を開始する。しかしこの番組も授業中に聴取するものではなく、「課外講座」であることが明記されていた。

こうした形で学校放送番組制作の実績が重ねられたこともあり、ようやく放送開始10周年を記念する形で、1935年4月15日に全国向け学校放送が始まった。曜日ごとに対象学年向けの枠があり、週ごとに異なる教科番組を放送していた（表3）。

当時の文部大臣・松田源治は学校放送開始の日に創設を祝福しながらも、その限界について次のように話している。「学校の課業は先生と児童とが、面と向かって親しく接触して初めて行われるものでありますから、ただ音声のみによるラジオ放送は、到底この働きにかかわることはできないのであります」。

こうした状況で始まった学校放送番組であるが、学校へのラジオ受信設備の普及が進み、1935年9月のNHKの調査によると、全国の小学校の56%がラジオ学校放送を利用していた。そして1941年4月、国民学校制度の実施にあたり施行された国民学校令施行規則で初めて、学校放送が教育課程に位置づけられる。

1945年3月に学校放送は休止されるが12月に放送を再開、連合軍総司令部民間情報教育局（CIE）により学校への受信設備の整備が進められ、1947年の教育基本法・学校教育法の制定に関連して、新しい学校制度・新しい教育課程に対応する番組の制作が進められた。

学校放送をどう利用するかという放送教育の研究も広がり、1949年8月に和歌山県高野山で学校放送研究会全国大会、1950年11月に東京で第1回放送教育研究会全国大会が開催され、放送教育研究会全国連盟が発足した。

表3 1935年4月 ラジオ学校放送開始時の学校放送番組表

時間	曜日	月	火	水	木	金	土
午前7:50～8:00		ラジオ体操	ラジオ体操	ラジオ体操	ラジオ体操	ラジオ体操	ラジオ体操
午前8:00～8:10		朝礼訓話					
午前10:10～10:20			幼児の時間				
午前11:00～11:10		尋1,2の時間					
午後2:00～2:20			尋3の時間		尋4の時間		
午後2:40～3:10			高1の時間	高2の時間	尋5の時間	尋6の時間	
午後3:10～3:40		教師の時間		教師の時間		教師の時間	

注：尋1から尋6は、尋常小学校1年（6歳）～尋常小学校6年（11歳）、高1・高2は、高等小学校1年（12歳）・高等小学校2年（13歳）
 『NHK年鑑』『学校放送テキスト』などをもとに作成

表4 1953年4月 ラジオ第2放送に全面移行した学校放送番組時刻表

種目	時間	曜日	月	火	水	木	金	土
学校向けラジオ体操と音楽	午前8:15～8:30		学校向けラジオ体操と音楽	学校向けラジオ体操と音楽	学校向けラジオ体操と音楽	学校向けラジオ体操と音楽	学校向けラジオ体操と音楽	学校向けラジオ体操と音楽
学校新聞	午前8:45～8:55		学校新聞	学校新聞	学校新聞	学校新聞	学校新聞	学校新聞
今日の学校放送(番組予告)	午前8:55～9:00		今日の学校放送	今日の学校放送	今日の学校放送	今日の学校放送	今日の学校放送	今日の学校放送
ラジオ国語教室音楽教室	午前9:00～9:15		音楽教室1年生	音楽教室2年生	音楽教室3年生	国語教室1年生	国語教室2年生	国語教室3年生
	午前9:15～9:30		国語教室4年生	国語教室5年生	国語教室6年生	音楽教室4年生	音楽教室5年生	音楽教室6年生
小学校	低学年	午前10:00～10:15	ことばあそび	こどものこよみ	うたのかばん	お話 たまてばこ	動物のくに	げんきな子ども
	中学年	午前10:15～10:30	わたくしたちの暮らし	たのしい音楽	ラジオ新聞	三郎のかんさつノート	みんなのことば	ラジオ図書館
	高学年	午前10:30～10:45	マイクの旅	季節だより	音楽の世界	このごろのできごと	日本の歴史にあらわれた人々	生きたことば
中学校	午前10:45～11:00		季節の科学	世界名曲めぐり	心の生活	名作をたずねて	世界の動き	世界の国々
再生放送	小学校低・中学年	午前11:00～11:15	げんきな子ども	わたくしたちの暮らし	こどものこよみ	ラジオ新聞	お話 たまてばこ	みんなのことば
	小学校高学年	午前11:15～11:30	生きたことば	マイクの旅	季節だより	音楽の世界	このごろのできごと	日本の歴史にあらわれた人々
	中学校	午前11:30～11:45	世界の国々	季節の科学	世界名曲めぐり	心の生活	名作をたずねて	世界の動き
高等学校	午前11:45～午後0:00		青年と社会	時の話題	今日の科学	私たちの学園生活	日本の古典	数学の要点
中学校ラジオ英語音楽教室	午後1:00～1:15		英語教室	音楽教室	英語教室	音楽教室	英語教室	
家庭と学校	午後6:30～6:45		やさしい教育学	子どもの世界	子どもによい音楽を	PTAの話題	教育界の動き	

『NHK年鑑』『学校放送テキスト』などをもとに作成

I-2 テレビ学校放送番組の始まり

1953年2月1日、NHKでテレビの本放送が始まった。

同じ1953年にラジオ学校放送番組は全面的に第2放送に移行、放送時間が平日3時間30分と拡充されている(表4)。同年にNHK放送文化研究所(以下、NHK文研と表記)が実施した「第3回学校放送意向調査」では、全国の小学校のラジオ普及率は90%を超え、学校放送利用率も40%以上で、『お話をまてばこ』『マイクの旅』などがよく利用されていた。ラジオ学校放送番組を利用する教師が増える中、テレビ学校放送番組は開始されたのである。

その開始に先立って、NHKでは1951年8月に教育学者、現場教師、文部省、東京都教育庁の専門家で構成された「視聴覚教育研究委員会」(のちにテレビジョン学校放送委員会)を設け、テレビ学校放送番組のねらいや内容についての研究を行っている⁹⁾。

テレビ実験放送は1950年11月から東京都世田谷区のNHK放送技術研究所の仮スタジオから始められていたが、1951年10月からは週1回15分の学校放送も開始、東京学芸大学附属竹早小学校など小学校2校、中学校2校の委嘱校で実証研究が進められた。

こうした研究を進めながら、テレビ本放送と同時にテレビ学校放送も開始される。月曜日から土曜日の午後1時から1時15分の時間に小学校向け番組枠が3つ(低学年、中学年、高学年)、中学校向け番組枠が2つ(低学年、高学年)、そして土曜日には、全学年向け課外活動番組『土曜クラブ』と、毎週1時間30分の番組が編成された(表5)。

各対象学年番組枠は、例えば、月曜日の小学校低学年向けの時間は『リズム遊び』『童話』

『おとぎの部屋』の3番組が隔々週で、小学校高学年向けの時間は『テレビの旅』『楽器の話』が隔週でという形で、計11番組が放送された。

こうした編成では一つのシリーズを隔週または隔々週でしか視聴できず、学校での系統的な利用は難しかったが、できるだけ多くの教科番組を制作する中からテレビ学校放送の可能性を探ろうとしていたのである。

学校放送番組の週ごとの放送時間は1958年に6時間20分、そして教育テレビ開局の1959年には総合テレビで7時間10分、教育テレビで5時間10分と拡大していく(表6)。

この時代に番組を制作、のちにテレビ学校放送部長となった豊田昭は、「テレビを「目のあるラジオ」つまり単にラジオの聴覚プラス視覚であるにとらえ、従来のラジオ放送と同様な内容に写真・スライド・タイトルをはさんで放送したような誤算があった」と回顧している¹⁰⁾。また、「視聴覚教育研究委員会」の一員の小川一郎(当時は国立教育研究所)は、「テレビにはテレビとしての表現文法があるはずであり、その文法を解明しながら番組を作る側と受け取る側は緊密に協力して計画的な実験を行わなければならない」と指摘している¹¹⁾。

教育現場での映像利用は明治時代からの幻灯用スライド、昭和初期からの映画がすでにあった。その中で、テレビ学校放送番組の基本的性格とはどのようなものなのか、活発な議論が行われた。音声と映像で教育内容を送る「映像メディア」と、放送波でジャーナルな内容を送る「電波メディア」という2つの側面の、どちらにどの程度力点を置くのかは、放送教育論の重要な論点として、この時代から繰り返し議論されることとなる。

表5 1953年2～3月 テレビ開局時の学校放送番組時刻表

曜日 時間	月	火	水	木	金	土
午後1:00～1:15	小学校 低学年向け	小学校 中学年向け	小学校 高学年向け	中学校 低学年向け	中学校 高学年向け	全学年向け
	リズム遊び 童話 おとぎの部屋	クイズ教室	テレビの旅 楽器の話	社会見学 季節の科学	美術鑑賞 科学の歩み	土曜クラブ

注：2～3番組を隔週放送あるいは隔々週放送した

『NHK年鑑』『学校放送テキスト』などをもとに作成

表6 1959年1月 教育テレビジョン開局時の学校放送番組時刻表

種目	曜日 時間	月	火	水	木	金	土
幼稚園・保育 所向け番組	午前 11:00～11:15	みんな いっしょに	/	人形劇	/	おてて つないで	/
小学校低学年 向け番組		/	おおきくなる子	/	はてなはてな	/	かずとことば
小学校中学年 向け番組	午前 11:35～11:55	たのしい教室	/	学校向け ラジオ体操と 音楽	/	わたしたちの くらし	/
小学校高学年 向け番組		(テレビ見学)	テレビの旅	/	くらしの歴史	/	ぼくらの 実験室
中学校向け 番組	午後 1:02～1:22	芸術の窓	※職業と家庭・ 保健体育	科学ノート	世界と日本	英語教室	/

注1：隔週交代の番組、「テレビ見学」は、定期的な番組ではなく随時放送された

注2：教育テレビジョン局は開局したが、教育テレビが受信できるのは、1959年度は東京、大阪だけであったので、学校放送は総合テレビジョンでも放送されていた

『NHK年鑑』『学校放送テキスト』などをもとに作成

表7 教育テレビ60年 学校放送番組関連年表1（1925～1958）

年	社会状況・教育政策	放送技術・メディア環境／番組編成／番組内容／ 番組利用・番組研究
1925～ (大正14～)	・満州事変勃発 (31.9)	・東京放送局、芝浦から仮放送開始 (25.3.22) ・ラジオ第2放送開始 (31.4) ・東京中央放送局、学校放送試験放送 (31.9) ・大阪中央放送局「学校向け放送」開始 (33.9)
1935～ (昭和10～)	・日中戦争勃発 (37.7) ・文部省、学校放送の利用を公認 (41.4)	・ラジオ学校放送全国向け放送開始 (35.4.15) ・学校放送用テキスト「放送教育通信」発行 (35) ・最初の学校放送調査実施 (35.9)
1945～ (昭和20～)	・終戦 (45.8) ・教育基本法・学校教育法制定 (47) ・文部省、初等中等教育課に、視聴覚系を設置 (49.3)	・学校放送休止 (45.3)、再開 (45.12) ・日本放送教育協会創立 (48.12) ・学校放送研究会全国大会、高野山で開催 (49.8) ・第1回放送教育研究会全国大会 (50.11) ・東京でテレビ本放送開始 (53.2.1)
1955～ (昭和30～)	・「一億総白痴化」が流行語となる (57.2) ・ソ連による人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げ成功 (57.10)	・日本放送教育学会設立 (55) ・全放送型テレビの学校への斡旋始まる (58.1)



テレビ学校放送の拡大期 (1959～70年代)

1959年1月10日、日本で最初の教育専門局として、NHK東京教育テレビジョン局が開局した。

開局に先立つ1957年1月、NHKは郵政大臣および電波監理審議会委員あてに「テレビジョンによる第二放送用周波数確保に関する要望書」を提出している。また同じ1月から、午後のみだった学校放送の時間帯を午前にも増やし1日2回とした。この背景にはテレビ学校放送番組への期待の高まりとともに、学校教育だけでなく家庭教育、社会教育、職業教育にテレビを利用していこうという構想があった。

ちょうどこの時期、社会評論家の大宅壮一が、「テレビというメディアは非常に低俗なものであ

り、テレビばかり見ていると人間の想像力や思考力を低下させてしまう」として「一億総白痴化」という流行語を生み出した¹²⁾。

こうした批判もあり、郵政省は教育専門局として、NHK東京教育テレビジョン局、続いて1959年2月に日本教育テレビ、1964年4月に科学技術教育専門局の東京12チャンネルに免許を与える。それぞれの放送局で学校放送番組や通信制工業高校講座などを放送したが、1973年に民放の両局とも教育放送だけでは経営が維持できないとして総合番組局に移行した。その一方で、NHK教育テレビではテレビ学校放送番組の放送時間を増やし、1964年度には月曜日から土曜日まで毎日5時間近く、計52シリーズの番組が放送されていた。

この章では、教育テレビ開局後の最初の20

表8 教育テレビ60年 学校放送番組関連年表2 (1959～1979)

年	社会状況・教育政策	放送技術・メディア環境
1959～ (昭和34～)	<ul style="list-style-type: none"> ・「岩戸景気」(58～61) ・皇太子ご成婚パレード(59) ・池田内閣「所得倍増計画」(60) ・小学校で58年改訂学習指導要領実施(61.4) ・「オリンピック景気」(62～64) ・東京オリンピック開催(64.10) 	<ul style="list-style-type: none"> ・NHK東京教育テレビジョン開局(59.1.10) ・NET(日本教育テレビ)開局(59.2) ・NHKカラーテレビ本放送を開始(60.9) ・NHKのテレビ受信契約者数、1,000万人を越える(62) ・日本科学技術振興財団テレビ(東京12チャンネル)開局(64.4)
1965～ (昭和40～)	<ul style="list-style-type: none"> ・「いざなぎ景気」(65～70) ・高校進学率が70%を超える(65) ・文部省『学校放送の利用』発行(66.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園・保育所向け番組カラー化完了(65) ・小学校向け番組カラー化開始(68) ・中学校向け番組カラー化開始(69) ・アポロ11号月面着陸、月面からのテレビ中継(69.7)
1970～ (昭和45～)	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪で日本万国博覧会始まる(70.3) ・小学校で68年改訂学習指導要領実施(71.4) ・第一次石油危機(73) ・高校進学率が90%を超える(74) 	<ul style="list-style-type: none"> ・NHK総合テレビ、全放送カラー化(71.4) ・高等学校向け番組カラー化開始(72) ・NET、東京12チャンネルが総合番組局となり、民放教育局消滅(73.11)
1975～ (昭和50～)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日新聞で「乱塾時代」連載(75) ・第二次石油危機(79) 	<ul style="list-style-type: none"> ・カラーテレビの世帯普及率が95%を超える(75) ・小学校の教室のテレビが全国平均で1教室1台に(75) ・ベータマックス方式VTR発売(75.5) ・VHS方式VTR発売(76.10) ・NHK教育テレビ、全放送カラー化(77.10)

年を5つの視点で整理する。

社会状況・教育政策をみると、この時期は「高度経済成長の時代」にあたる。池田内閣のもと所得倍増計画が進められ、1964年の東京オリンピックに向けて、大規模なインフラ整備が進められた。基礎的、科学的知識の系統的な学習を重視する「教育の系統性」、時代の進展に対応した教育内容を導入する「教育内容の現代化」が重視されていった。

放送技術・メディア環境の面では1960年にカラーテレビ放送が開始、1975年にはカラーテレビの世帯普及率が95%を超える。

こうした時代状況の中、学校放送番組の編成は、各学年、各教科への対応が進められ、放送時間も拡大していった。

番組内容も映像の特性を生かしてどんな教育

番組が放送できるのか、白黒からカラー化することで、どんな演出が可能か、テレビ学校放送番組の開始にあたってさまざまな試みが行われた。

放送番組の利用研究が進むとともに、利用方法の論争が生まれたのもこの時代である。

表8に示すようなテレビ学校放送の制作と利用が広がっていった20年を5視点でみる。

- II-1 「教育の系統性」重視の時代
 - II-2 テレビ放送の広がりカラー化
 - II-3 放送時間の拡大と各学年・教科への対応
 - II-4 映像で何を伝えられるかの模索
 - II-5 放送教育研究の全国展開と「ナマ、丸ごと、継続」論
 - II-6 小括
- <コラム『山の分校の記録』>

番組編成／番組内容	番組利用・番組研究
<ul style="list-style-type: none"> ・最初のテレビ道徳関連番組『大きくなる子』放送開始 (59) ・『山の分校の記録』第1部放送 (59.11), 第2部放送 (60.3) ・『山の分校の記録』イタリア賞受賞 (60.9) ・学校放送番組の放送時刻大改正 (64.4) ・特殊教育向け番組『たのしいきょうしつ』放送開始 (大阪放送局制作) (64.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第11回放送教育研究会全国大会 (京都大会) で西本・山下論争 (60.11) ・第14回放送教育研究会全国大会 (静岡大会) で参加者が初めて10,000人を超え17,000人が参加 (63.11) ・全放連、放送教育研究論文の賞「学校放送教育賞」を設置 (64)
<ul style="list-style-type: none"> ・教育番組の国際コンクール「日本賞」(NHK主催) 開始 (65.10) 	<ul style="list-style-type: none"> ・全放連で第一次研究3か年計画を作成 (65)
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校高学年・中学生対象の環境教育番組『みどりの地球』放送開始 (75.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『放送教育』で放送学習と放送利用学習について誌上シンポジウム (78)

Ⅱ-1 「教育の系統性」重視の時代

NHK教育テレビが開局した1959年は皇太子のご成婚パレードが行われたこともあり、白黒テレビの普及が200万台を超えた。テレビの時代の幕開けである。

時代は高度経済成長にあたり、「岩戸景気」(1958～61)、「オリンピック景気」(1962～64)、「いざなぎ景気」(1965～70)と好景気が続く。

「白黒テレビ」「電気洗濯機」「電気冷蔵庫」の「三種の神器」、そして「カラーテレビ」「クーラー」「カー(自家用車)」の「新三種の神器」などの家電製品が普及。テレビは家庭に普通にあるものとなり、1962年にはNHKのテレビ受信契約者数が1,000万人を超える。

また、国際的なイベントとして東京オリンピック(1964)、大阪万国博覧会(1970)が開催され、大量生産・大量消費が日常化、大衆消費社会を迎えていく。

この時代の学習指導要領はどんなものであったろうか。1958年告示、1961年実施の学習指導要領では、「教育内容の拡充」が進められ、授業数が拡充された。例えば小学校6年生の週あたりの授業数は28コマ(1コマは45分)から31コマになる¹³⁾。

戦後の新教育では、アメリカの進歩主義のもと、学習者の興味・関心から出発する「経験主義」が重視され、新教科として社会科が設立された。しかし1961年実施の学習指導要領では、明治期から戦前まで続いてきた、教師主体で体系的に知識を学ぶ「系統主義」への転換が進められた。小中学校の教育課程の一領域として「道徳の時間」が特設されたのもこの時期である。

この学習指導要領では視聴覚教材の積極的な活用も謳われた。学校教育へのテレビの導入

が積極的に進められたのである。

高度経済成長とともに高校進学率も上昇していく。1965年に70%、1974年には90%を超える。ほとんどの生徒が高校受験をすることから学歴主義が強くなるのもこの時期である。

続く1971年から実施の学習指導要領でも系統性重視の傾向は変わらず、時代の進展に対応した教育内容を導入する「現代化カリキュラム」が進められる。

右肩上がりでの経済が成長し、産業が発展していくという未来予想のもと、それに見合った高度で体系化された教育内容が求められていたのである。

この指導要領は2019年現在に至るまで最も内容の多いものとなり、その内容すべてを教えるために速く進む授業が「新幹線授業」と批判され、いわゆる「落ちこぼれ」が問題になり始める。

70年代は高度経済成長のひずみがみえてきた時代でもある。四大公害病が発生、都市部を中心に光化学スモッグが問題化していく。

また、1973年、1979年の2度の石油危機により鉱工業生産が落ち込み、物価高騰と雇用減少を引き起こしていった。そして、不況により大企業が採用人数を減らしたことで、学歴主義が加速化していく。

1975年には毎日新聞の連載記事「乱塾時代」が話題を集める。学校の授業の補習として、あるいは受験対策として、首都圏を中心に塾に通う小中学生の増加、低年齢化が始まった。

1960～70年代は、高度経済成長の一方で、その問題点もみえてきた時代である。教育現場でも、学習内容の増加による問題が生まれつつあった。こうした時代背景のもとに、教育テレビで学校放送番組は放送時間を拡大していく。

Ⅱ-2 テレビ放送の広がりカラー化

1960年代は白黒テレビが全国に普及するとともに、カラーテレビの実用化が進められた時代である。

日本のカラー放送は1960年9月10日、アメリカと同じ走査線525本のNTSC方式で始まった。NTSC方式は白黒テレビとの互換性があるのが大きな特徴である。

初期のカラー放送は、まだ放送局の設備も十分でなく、外国のカラー映画の放送やスポーツ中継、短時間の教養番組などが中心で、1961年のNHK総合テレビのカラー番組は1日1時間であった。その後はカラー化が進み、NHK総合テレビは1971年4月、NHK教育テレビは1977年10月に全放送がカラー化する。

教育テレビのカラー化は、幼稚園・保育所向け番組が最優先で進められ、1965年度にはすべての番組がカラー化された。その後、小学校向け番組は『理科教室1年生』（1968）から、中学校向け番組は『安全教室』（1969）から、高校向け番組は『美術の世界』（1972）から順次カラー化が進められ、1977年に教育テレビのカラー化が完了する。

こうした時代、テレビは学校にどのように広がっていったのであろうか。

1960年代に学校に設置されたテレビの多くは、全国放送教育研究会連盟（全放連）が、無線通信機械工業会（1958年からは日本電子機械工業会、現在は一般社団法人電子情報技術産業協会）と共同して普及を進めた「全放連型教育テレビ受像機」である。

当時の家庭用テレビは14インチのブラウン管が主流であったが、「全放連型教育テレビ受像機」は教室で見ることが前提なので、17インチのブラウン管で家庭用より大きい仕様にされ、教

室の高い位置に設置するためにブラウン管を下向きに傾斜させた機種や、ブラウン管を保護する扉のついた機種もあった。

また単独式の受信機だけでなく、職員室にチューナーを備えた親機を置き、各教室にはモニター機能のみの子テレビを置く、親子式のシステムが導入されることもあった。

全放連型テレビの1958年の価格は松下電器（現パナソニック）、ビクター、日立をはじめとする各メーカーすべてが、教育特別免税価格の6万円であった。当時10万円以上であった家庭用テレビよりも安い金額に設定され、国からの補助金もあり、学校現場に広く普及していった。

NHK文研の学校放送利用状況調査¹⁴⁾では、1960年度から1校あたりのテレビ平均所有台数を算出している。1960年度は1.3台であったが、1969年度は6.9台にまで増加している。しかし当時の小学校の平均クラス数は12クラスであり、1台のテレビを交代で視聴することや、複数のクラスで同時に視聴することが多かったようである。

全国平均で1教室1台になるのは1975年。このころから、各教室に常設のテレビで継続的に学校放送番組を利用することが可能になった。

ただし、カラーで放送されていても、多くの小学校では白黒テレビでの視聴が続き、カラー視聴が一般的になるのは1980年代以降になる。この時期の番組制作者は、カラー映像の効果を生かしつつも、白黒テレビで視聴する子どもたちを意識した番組制作が求められた。

1960～70年代はテレビが家庭にも学校にも急速に広がるとともに、カラーテレビが徐々に日常化していった時代であった。

Ⅱ-3 放送時間の拡大と 各学年・教科への対応

1959年の教育テレビ開局時に週あたり5時間10分であった学校放送番組の放送時間は順次拡大、教師向け番組も含めると1964年には週あたり40時間と、教育テレビで最も長く放送される番組となる(表9)。

1964年の学校放送番組の編成は、全国の小中高校の要望をもとに、放送番組時刻表の大改正を行い、「学年、教科、校種別」に番組を編成して、1980年代までの編成の基本形となるので、この番組表をもとに学校放送番組の編成の特徴をみていく。

編成の特徴の1点目は放送時間帯の設定である。学校放送番組は家庭での視聴や、教師が授業の参考として見る場合もあるが、基本的には教室で子どもと教師が見ることを考えて制作しているため、放送時間は学校に子どもたちや教師がいる時間となる。そのため表9にあるように、月曜日から金曜日の午前9時から午後4時と、土曜日の午前9時から午後2時に番組が編成された。

2点目は番組の対象学年ごとに放送時間帯を固定していることである。この時代の学校放送番組は、幼稚園・保育所向け、小学校向け、中学校向け、高校向けすべて20分であるが、例えば小学校低学年向け番組は午前9時から9時20分と午前11時から11時20分の2つの時間帯に、国語1番組、社会2番組、理科2番組、音楽1番組、道徳1番組が編成されている。対象学年ごとに決まった時間に放送することで、教師が利用する際に時間割を組みやすく、子どもたちに放送開始時間を意識してもらうことが可能になった。

3点目は再放送の工夫である。原則として1つ

の番組は同じ週の後半の別の時間帯に再放送、さらに翌週も同内容のものが再放送され、本放送1回、再放送3回が基本となっている。放送回数を増やすことで、各学校の授業の進み具合で視聴時間を選択することや、学校行事などで視聴できなくても再放送を見ることができるようにしているのである。

4点目の特徴は表9からはわからないが、夏季、冬季、春季の長期休暇中の特別編成である。例えば1964年は7月20日(月)から、学校放送番組を放送していた時間帯の編成が変わり、『小学生の時間』『中学生の時間』『高校生の時間』として、1学期に放送した番組の再放送や、通常編成では放送していない特別番組の放送をしている。1964年7月でみると、『体育のしおり—夏休みの健康生活—』(中高校生向け)、『楽しいスクリーン「日本の海上輸送」—国内航路—』(小中学生向け)などが特別番組である。

こうした番組編成については、教師が事前に放送予定を知って、視聴計画を立てられるように、冊子が発行された。毎年3月に発行、全国の幼稚園、小学校、中学校、高校に送付される『学校放送利用のてびき』(日本放送教育協会発行)、それと年3回、幼稚園・保育所、小学校(学年ごと)、中学校、高校向けに、学期ごとに販売される『学校放送テキスト』(NHK出版発行)である。

例えば1964年度は番組ごとに1学期14本、2学期16本、3学期10本の計40本を基本に放送しているが、『学校放送利用のてびき』には放送回のタイトルと2行程度の番組概要、『学校放送テキスト』には各回について半ページ程度の概要が掲載されている。

学校の授業での利用を考えた番組編成、内容周知はこうした形で完成していく。

表9 1964年4月 教育テレビ学校放送番組時刻表

対 象	曜日 時間	曜日						土
		月	火	水	木	金		
小学校 低学年	午前 9:00～9:20	理科教室 小学校2年生	(再)理科教室 小学校1年生	おとぎのへや (国語)	(再)うたいまし ようきましよう (音楽)	(再)はたらく おじさん (2年社会科)	うちのひと がっこうのひと (1年社会科)	
中学校	午前 9:20～9:40	わたしたちの 社会	理科教室 中学校1年生	理科教室 中学校2年生	理科教室 中学校3年生	(再)日本の地理・ 世界の地理	(再)日本の歴史	
幼稚園 保育所	午前 9:40～10:00	きたきたきたよ	(再)みんないっ しょに	(再)おじさん お話してよ	(再)人形劇	(再)ドレミファ 船長	(再)おてて つないで	
小学校 中学年	午前 10:00～10:20	みんななかよし (道徳)	(再)わたしたち のくらし (4年社会科)	理科教室 小学校3年生	(再)理科教室 小学校4年生	(再)良太の村 (3年社会科)	(再)みんなの 音楽	
中学校	午前 10:20～10:40	英語教室 中学校2年生	英語教室 中学校3年生	(再)理科教室 中学校1年生	(再)理科教室 中学校2年生	(再)理科教室 中学校3年生	(再)英語教室 中学校1年生	
幼稚園 保育所	午前 10:40～11:00	みんな いっしょに	おじさん お話してよ	人形劇	(再)ドレミファ 船長	(再)おてて つないで	(再)きたきた きたよ	
小学校 低学年	午前 11:00～11:20	理科教室 小学校1年生	(再)理科教室 小学校2年生	うたいまし ようきましよう (音楽)	はたらくおじさん (2年社会科)	大きくなる子 (道徳)	(再)おとぎのへ や(国語)	
中学校	午前 11:20～11:40	英語教室 中学校1年生	(再)英語教室 中学校2年生	(再)英語教室 中学校3年生	(再)理科教室 中学校1年生	(再)理科教室 中学校2年生	(再)理科教室 中学校3年生	
小学校 高学年	午前11:40～ 午後0:00	テレビの旅 (5年社会科)	くらしの歴史 (6年社会科)	理科教室 小学校5年生	(再)音楽教室	(再)理科教室 小学校6年生	明るいなかま (道徳)	
特殊学級 と小・中 学校	午後 0:00～0:30	テレビ特殊学級 たのしい きょうしつ						
	午後0:30～1:00	たのしいひる休み						テレビろう学校
中学校	午後 1:00～1:20	芸術の窓	日本の地理・ 世界の地理	(再)わたしたち の社会	(再)日本の 歴史	(再)技術・ 家庭科	1:30～2:00 母親から 教師から	
小学校 中学年	午後 1:20～1:40	わたしたちの くらし (4年社会科)	良太の村 (3年社会科)	理科教室 小学校4年生	(再)理科教室 小学校3年生	みんなの音楽		
高等学校	午後 1:40～2:00	世界の地理	理科教室 高等学校 (物理・化学)	理科教室 高等学校 (生物・地学)	高校生の 英会話	高校生の広場 (特別活動)		
中学校	午後 2:00～2:20	わたしたちの 進路 (特別活動)	(再)芸術の窓	(再)英語教室 中学校1年生	(再)英語教室 中学校2年生	(再)英語教室 中学校3年生		
小学校 高学年	午後 2:20～2:40	理科教室 小学校6年生	音楽教室	(再)くらしの 歴史 (6年社会科)	(再)テレビの 旅 (5年社会科)	(再)理科教室 小学校5年生		
幼稚園 保育所	午後 2:40～3:00	ドレミファ船長	おててつないで	(再)みんな いっしょに	(再)おじさん お話してよ	(再)人形劇		
中学校	午後 3:00～3:20	技術・家庭科	(再)わたしたち の社会	日本の歴史	(再)日本の地理・ 世界の地理	(再)わたしたち の進路 (特別活動)		
高等学校	午後 3:20～3:40	家庭科教室	芸術鑑賞	(再)理科教室 高等学校 (物理・化学)	(再)理科教室 高等学校 (生物・地学)	(再)高校生の 英会話		
教師向け	午後 3:40～4:00	こどもの 心からだ	教室の アイデア	教師の時間 教育界の話題 日本の子ども	放送教育の てびき	新しい 学習指導		

注1：『放送教育の歩み：全放送達成25周年記念』（全国放送教育研究会連盟編1974年）と『NHK年鑑』をもとに作成
 注2：幼稚園・保育所向け、午前10:40～11:00の放送はカラー放送であった

II-4 映像で何を伝えられるかの模索

テレビ学校放送番組が始まった当初は、すべての番組が生放送であった。ドラマが最後までたどりつかない、理科番組ではカエルなどの小動物がカメラの前から逃げてしまう、リハーサルでうまくいった実験に失敗するなど、さまざまな混乱があったようである。

1959年の教育テレビ開局前後に採用された若いディレクターが番組を制作する機会も多く、テレビ出演に慣れていない教師や児童劇団の子どもたちと一緒に、テレビ学校放送番組の特性とは何か、日々議論を重ね、試行錯誤をしながら、番組が制作されていった。

それまで教育目的に利用されてきた映像教材のスライドや教育映画とは異なり、ラジオ放送の延長として、電波の特性である同時性や速報性を生かした番組づくりも試行された。

例えば、小学校向け理科番組『テレビ理科教室』では桜の開花時期に札幌、東京、福岡の3か所の生中継を行い、同じ日本でも緯度によって桜の開花の時期が異なることを伝える、同時性を生かした試みが行われた。

「教室番組」とも呼ばれる、教科教育の内容に沿った学年別の体系的な番組だけでなく、教科教育の目的に沿いつつ、さらに幅広い年齢層の子どもたちに多様な内容を提示する番組も必要であるという考え方も、ラジオ学校放送からテレビ学校放送に引き継がれた。例えば1953年テレビ開局時の番組(表5 139p)の『クイズ教室』は、小学校中学年向けに、写真、漫画、地図などを用いて、理科、社会、算数をはじめ、教科外の常識や情操教育にわたる内容を伝えるものであった。

テレビ放送初期の学校放送番組が複数学年を対象としているのは、放送時間が限られてい

るからだけでなく、放送の役割は教科書教育の補充ではない、というラジオ放送初期と同様の考え方が根底にあったからでもある。

1959年の教育テレビ開局とともに、放送時間が拡大され、学年、教科、校種別の番組を放送できる枠が生まれ、学習指導要領が「経験主義」から「系統主義」に重点を置くようになったが、学年別の教科番組と複数学年対象の総合学習番組の両方があることがテレビ学校放送番組の大きな特徴である。

ベーシック・プレゼンテーションとカリキュラム・エンリッチメント

1960年代には、オハイオ州立大学で長く全米ラジオ教育研究会を主宰したタイラー博士により、学校放送番組の2つのタイプが提唱され、NHKの番組制作にも影響を及ぼした。

■ベーシック・プレゼンテーション

教室の授業内容に関する規定に沿って、教科の基礎的な内容を提供する番組

■カリキュラム・エンリッチメント

放送によって最新の教材や豊富な実例を提供し、教室のカリキュラム展開を豊かにすることをねらった番組

また、テレビ番組に教師が出演して、カメラの向こうの子どもたちに直接教授する、ダイレクト・ティーチング形式にすべきなのか、授業で利用しやすい資料性が高いものを放送すべきなのかという議論もなされた。

さらに、こうした考え方を各教科の特性を生かす形でどのような番組にすればよいのか、それぞれの教科番組の担当者たちは試行錯誤しながら番組を制作していった。

学校放送番組制作にあたり、大きな方針は前

述の「視聴覚教育研究委員会」(のちにテレビジョン学校放送委員会)で議論されるが、個々の教科番組については、その教科の専門家や現場教師を交えた番組委員会での議論をもとに年間計画や個々の番組の内容が決まる。

以下では学校放送番組で利用が多い、理科、社会科、道徳、そして、複数学年対象である特殊教育¹⁵⁾番組について、番組制作者がどのようなことを考えながら番組を制作してきたのかをみていく。

「思考モデル」としての理科番組

理科番組は、学校放送番組で常に利用率が高く、早くから各学年対応の番組が進められてきた。順調に利用が広がってきたようにみえるが、その背景には、番組制作者が「実験や観察という直接経験をベースに展開するのが理科教育である」という考え方に対して、「間接経験である放送番組視聴をどう位置づけていくのか」を考え続けてきた歴史がある。

テレビ学校放送番組が始まる以前にも、映画を中心とする視聴覚教育教材はあったが、その目的は、子どもが直接体験できないような事物や現象を取り上げる「教室の授業の補助的役割」とされてきた。理科番組に対しても、例えば教室では見ることでできない、「アサガオのつるが成長していく様子」や「動物プランクトンの捕食の様子」、「メダカの卵の中の孵化の様子」などの、高速度撮影によるスローモーションや顕微鏡撮影、レントゲン撮影などの特殊撮影に対する期待があった。

しかしこうした特殊映像は、撮影に長い時間がかかるが、映像としては数秒から数分である。毎回20分×年間40本の番組を特殊撮影だけで構成することはできない。

そこで、当時の理科番組担当者は現場教師や

研究者と長い議論を重ねて、テレビの視聴がそのまま理科教育になるという直接教育(ダイレクト・ティーチング)という考え方を採用した。テレビティーチャーと呼ばれる、理科を専門とする教師と子ども役(キャラクターの場合もある)が番組に出演し、単に珍しい映像を提供するだけでなく、理科の論理と合わせて提供するというものである。

しかしここでもまた、直接的な体験学習と放送による間接体験が問題になった。

そこで考えられたのが、理科教育における問題解決学習のプロセスを基本として、放送番組でそのモデルを示すという考え方である。自然の事物や現象を見て問題を発見する、仮説を立てる、その仮説を実験や観察で検証して問題を解決する、というプロセスを映像化したのである。

番組の構成としては、問題発見のシーンが大事であると考えられ、子どもが疑問を持つような自然の事物や現象を提示すること、そして、スモール・ステップを刻みながら思考プロセスを描くことに重点が置かれた。

当時の番組制作者は子どもの思考プロセスを実際に確認するために、教室に何度も足を運んだ。また、特別撮影のために実験グループが組織され、NHKにつくられた理科実験室で実験を重ねたり、屋上花壇で実際に植物を育てたりしながら撮影を行い、わかりやすい映像を撮るための工夫を重ねていった。

長く理科番組を制作してきた堀江固功は、後年、理科番組制作の基本方針を次の4点に整理している¹⁶⁾。

1. シリーズ番組であることを生かした制作をする。～継続視聴が前提～
2. 指導要領に準拠した放送のカリキュラムを確立する。～学校理科と同じ内容～
3. 放送の論理より教科の論理を優先する。

～映像表現より中身を重視～

4. 現場の教育との連携の中で番組を制作する。～現場の意見を制作に反映～

こうして理科番組はダイレクト・ティーチングという考えを中心に、1970年代には小学校1年から6年までのすべての学年で70%以上という、他教科より圧倒的に多く利用される番組となっていた。

「問題解決学習」を目指す社会科番組

地域の課題や社会的機能を発達段階に応じて学習する社会科は、戦後に米国教育使節団の助言に基づき生まれた新教科である。

社会科は他の教科と比べると、系統主義より経験主義の色合いが濃い。各学年で学ぶ主題は「学校や家庭」「市町村」「都道府県」「日本と世界」というように同心円状に広がり、それぞれの段階での社会の機能や役割、地理や歴史を学ぶという構成になっている。

その一方で、地理・歴史の系統学習の強化が学習指導要領で強調されるようになったのが1960～70年代である。

こうした時代状況の中、社会科番組制作者は、理科番組のようなベーシック・プレゼンテーションの方向をとらず、カリキュラム・エンリッチメントの方向性は変えずに、教室の授業に合い、かつ、社会科教育界の動向も取り入れた番組制作を進めた¹⁷⁾。そのため、番組に「テレビティーチャー」が出演するのではなく、例えば小学校4年生向け社会科番組『わたしたちの暮らし』では、カメラマン役の「くらさん」が、現地取材をしてその土地の人々の暮らしを紹介することを重ねる中から、社会的な考え方を伝えようとした。

しかしながら、この考え方にも課題があった。全国一律に同じ内容を放送するテレビ番組には

典型的な事例が求められるのに、特定の地域の特定の事例紹介でよいのかということである。とはいえ、理科と異なり、社会科で典型的な事例を紹介することは難しい。

小学校3年生の社会科は、市町村など自分たちの周囲の地域を学ぶことになっている。1960年代に放送された『良太の村』という番組は、「福沢プラン」¹⁸⁾で知られる神奈川県南足柄地区の福沢小学校とその地域で、子どもたちが地域の問題を発見していく形式で制作された。この地域は丘陵地帯が広がりみかん栽培が中心で、良太の家もみかん栽培の専業農家である。しかし、良太の家の暮らしは、平野部の米の専業農家とは異なるし、兼業農家や都会のサラリーマンの暮らしとも異なる。

そこで、地域の特殊な事例を描きながら、番組を見ている子どもたちが、自分たちの地域に結びつけやすい演出をとった。例えば良太の父が伝染病にかかるという回では、全国各地に保健所があり、地域住民の健康と衛生を考える役割を果たしていることに気がつくように、特殊な事例を一般化しやすいような演出がとられた。

もちろん、こうした演出方法が理解されるためには教師の協力が不可欠である。特定の地域の事例を描く番組をもとに、自分たちの地域の問題を考え、さらに一般化していくためにはどうしたらよいのか。番組制作者と、授業実践者である教師、そして研究者による授業研究も重ねられた。

日本各地の地理や産業を扱い、その現状と課題を提示する5年生向け社会科番組『テレビの旅』の制作スタッフは、社会科番組制作の柱を次の4点にまとめている¹⁹⁾。

1. 知識注入ではなく問題解決学習へ
2. 唯語主義ではなく唯映主義へ
3. ベーシック・プレゼンテーションではなくプ

ログラム・エンリッチメントへ

4. 人間存在のドキュメンタリーを

問題解決を重視し、テレビならではの画面に映し出すもので語らせる手法、そして、最新の教材や豊富な実例を、その地域に生きる人々の日々の姿を通して描くことが、社会科番組では目指されたのである。

「価値葛藤」を生み出す道徳番組

最初のテレビ道徳関連番組『大きくなる子』は、特設教科「道徳」が設置され、教育テレビが開局する1959年に始まる。戦前の修身科復活に反対する声がある中でのスタートで、当時は「生活指導番組」と位置づけられた。

ラジオ第2放送ではすでに「生活指導番組」中学年向け『仲よしグループ』（1954）、低学年向け『こねこみー』（1955）、高学年向け『明るい学校』（1955）を制作していた。これらの番組は、「学校、家庭、近隣、社会等に起こる問題を児童なりに考え、そしてみんなで力を合わせながら解決していく姿を通して、問題の把握力、正しい社会生活の理解、そして実践力」を養うことをねらいとしたことが当時の『NHK学校放送テキスト』に記されている。「経験主義」に重点を置く「複数学年対象の総合学習番組」の要素が強く、テレビ道徳番組に引き継がれていく。

1962年からは道徳関連番組として低学年向け『大きくなる子』、中学年向け『みんななかよし』、高学年向け『明るいなかま』の3シリーズがスタートする。

道徳番組の制作は、子どもたちに身近な生活ドラマが基本とされた。道徳の読み物教材に登場するような名作や偉人伝を取り入れようとした時期もあったが、子どもたちが番組の登場人物に感情移入して、自分事として「価値葛藤」場面をとらえ、話し合いや討論をする授業が増えて

いったためである。道徳番組も「カリキュラム・エンリッチメント」が指向されていたといえる。

子ども1人1人に目を向けた 特殊教育番組

1964年4月、大阪放送局で特殊教育向け番組として『たのしいきょうしつ』がスタートする。近畿地方には障害児教育を先駆的に行ってきた滋賀県の近江学園をはじめ、特殊教育・障害児教育（現在は特別支援教育）の研究者や実践者が多かったこともあり、特殊教育番組が2011年度まで大阪で制作されてきた。

『たのしいきょうしつ』では、障害を持つ子どもたち1人1人が日常生活や社会生活の基本を理解できるように、次のような方針で演出を行った²⁰⁾。

- (1)1回の放送にいろいろなものを詰め込まず、ワンテーマ、ワンポイントで、理解しやすい内容にする。
- (2)子どもにとって、身近な素材、興味ある素材を取り上げる。
- (3)画面は、クローズアップを多用し、事物を大きく正確に見せる。
- (4)カットつなぎ（異なる画面を次々につないでいくこと）にせず、子どもが理解しやすいように、ワンカメラで連続した画面づくりをする。
- (5)出演者の呼びかけを多くし、子どもの集中力が拡散しないようにする。
- (6)教室の子どもとテレビの出演者が、いっしょに歌ったり、踊ったりするような交流の場面をつくる。

映像で何を伝えられるか、教科、対象ごとに模索が続けられていったのである。

Ⅱ-5 放送教育研究の全国展開と「ナマ、丸ごと、継続」論

学校放送番組の大きな特徴は、「家庭という私的な場で、少数の視聴者が見る」教育番組とは異なり、「教室という公共の場で、教師が介在して、複数の子どもたちが見る」ことを考えてつくられていることである。

そのため、「番組を見ることで教育目標が達成されるのか」「番組が授業でどのように利用されているのか」「番組を効果的に利用するにはどのような方法があるのか」などの番組内容や利用状況、利用方法についての研究が、研究者、利用する教師、そして番組制作者の3者で進められてきた。

その中心となったのが、1950年に結成された、全国の幼稚園、保育所、小中高等学校、特別支援学校の放送教育実践者、利用者が全国8ブロックに分かれて活動している「全国放送教育研究会連盟」と、1955年に設立された「日本放送教育学会」（1998年からは「日本教育メディア学会」）である。

この時代には視聴覚教育の研究も熱心に進められた。1954年には、のちに「日本放送教育学会」と統合する「視聴覚教育研究協議会」が設立されている。また、1956年に来日したエドガー・戴尔²¹⁾が示した「経験の円錐」という、抽象から具体の次元に沿って経験を11の段階に分類し、多様な教育メディアを活用することで教育的に豊かな経験が得られるという考え方が大きな影響を及ぼした。

1950年代後半～1970年代は学校放送番組の放送時間が拡大するとともに、放送教育や視聴覚教育の研究が盛んに行われていった。

文部省『学校放送の利用』の発行

戦前、ラジオ学校放送番組の利用に積極的でなかった文部省も、戦後になるとテレビ学校放送番組の利用を推奨するようになった。

1966年発行の『学校放送の利用』（文部省）は、各地域の指導主事等の指導の参考として、教師が番組利用を授業に位置づける指針となった。冊子の編集は教育研究者、番組を利用している教師、NHKの番組制作者などからなる「学校放送利用研究委員会」により行われた。

冊子では「学校放送にはどんな教育効果が期待できるか」として、次の12点を挙げている。

- (1)新鮮な経験を与えて、豊かな想像力や学習への興味を育てる。
- (2)未経験あるいは追体験の困難な事物や事象に対して、具体的な理解の手がかりを与える。
- (3)事象の関係、構造、過程などを要約した形で示し、事象の全体的な理解を容易にする。
- (4)因果関係や論理の展開を要約して示し、筋道を立てて考えることを知らせる。
- (5)統計資料その他学習のための新しい参考資料を提供する。
- (6)練習のための正しい模範を与える。
- (7)鑑賞や批判のためのすぐれた資料を提供する。
- (8)情緒に訴え、望ましい心情や態度を育てる。
- (9)日常生活指導において共通の関心や問題意識をよび起こして、問題の解決を容易にする。
- (10)正確な共通語が身につく、意見や感想の発表が活発になる。
- (11)家庭における放送の視聴態度を望ましい

方向に育てる。

(12)教師に指導上の示唆や模範を与える。

(1)から(10)までは各教科等の授業に直接役立つ効果として挙げられているが、(11)は教室で学校放送番組を見ることが、家庭での番組の見方、視聴態度にもつながること、(12)は教師自身が新しい情報を得ることや、指導法を身につけることの効果が挙げられており、学校の授業だけでない教育全般への効果が期待されていることがうかがえる。

一方で、「これらの教育効果はすぐれた番組を前提にはじめて期待できることで、これらは番組制作への要望もこめられている」と指摘されている。

全放連の活動の広がり

文部省から学校放送番組の授業利用への指針が示される中、放送教育を推進する全国放送教育研究会連盟(全放連)は活動を広げていく。全国8ブロック(北海道、東北、関東甲信越、東海北陸、近畿、中国、四国、九州)に地方研究協議会があり、また、各都道府県・地区単位の研究会が研修や研究活動を行っている。

全放連では1950年から年に一度の全国大会を毎年開催している。幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校(特殊学校)での公開授業と学校種ごとやテーマごとの分科会や部会を、原則2日間の日程で開催している。

全国大会は8ブロックの持ち回りで開催され、1963年の静岡大会(東海北陸ブロック)で初めて1万人を超える1万7,000人が参加、その後も1970年代は1万人程度が参加する大研究会となっていった。

全放連では1965年度から研究3か年計画を作成、第一次研究3か年計画の主題は下記にな

る。

1965年度(第1年度)

「だれにもどこにも放送教育の理解を」

1966年度(第2年度)

「すべての教師が放送教育の認識を」

1967年度(第3年度)

「すべての子どもに放送教育の豊かさを」

こうした主題のもと、放送教材を計画的に利用するための方策や、各教科等のねらいや課題に対する放送教材の役割、効果の高い指導法などの研究が行われた。

また、全放連では1964年に放送教育研究論文の賞として「学校放送教育賞」(1985年からは「放送教育賞」)を設置している。幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校(特殊学校)、さらに海外の日本人学校から毎年100点前後の応募があり、入選論文は論文集として発刊された。

学校へのテレビの設置と番組利用が広がり始めた時代、こうした全放連の活動は、多くの教師によるテレビ学校放送の利用につながる啓蒙的な活動となり、学校放送番組の利用率の向上にもつながった。

放送教育研究をめぐる論争

研究者による放送教育の理論的研究も進められていった。その中心となったのが西本三十二である。

西本は米国のコロンビア大学へ留学して、デュイ²²⁾やキルパトリック²³⁾から、進歩主義教育運動²⁴⁾を直接学んだ経験があり、国際的な視野から放送教育の必要性を説いた。教育番組は教科書とは異質の教授メディアであり、独立した教育的価値を持っているので、教科書の補助教材として利用するのではなく特質を理解して利用すべきであると唱えた。

そのため教師の役割もテレビに対しては「ティーチャー」ではなく「チューター」であるとして、「テレビ・チューター論」を展開する。教師主導の教え込み教育ではなく、学習者である子どもの意欲を大切にするという考え方である。教師は放送が児童・生徒に直接教える機能があることを認めて、その補助的役割に徹するべきであるとしたのである。

そして、そのための番組利用論として「ナマ、丸ごと、継続」を主張する。

「ナマ、丸ごと、継続」とは、番組利用に際して、放送時に生で教師と子どもが視聴し、部分利用や分断利用ではなく番組全体を利用し、年間のシリーズ全体を継続して利用するというものであった。

具体的には、番組を教科書の補助教材とするのではなく、放送教材を利用した独自のカリキュラムを組み、教科書教材によるカリキュラムと並行して利用する「並行カリキュラム」を推奨した。

さらに放送教材は予知性がないことが特色であるので、この特性を生かした授業方略を考えるべきであるとし、前もって教材研究が必要であると考える教師と意見を異にした。

こうした西本の主張に異論を唱えたのが、1960年に京都市で行われた全国放送教育研究会全国大会での鹿児島大学教授・山下静雄の発言である。山下は「教室教師こそ主体的に学校における教育課程にしたがってカリキュラムをたて、放送番組をいかに位置づけるかの主役である。教室教師の事前事後の指導を含む教授計画に放送教材をどう位置づけるかが重要である」と主張した。

山下は小学校訓導として学校教師を経験したあと、広島大学哲学科でヘルバルトなどドイツ教育哲学を学び、現場教師と協力して実践

的放送教育論を積み上げていた。

雑誌『放送教育』は、1961年に3回にわたって「これからの放送教育」を連載して、この「西本・山下論争」の討議とその後の教育界に与えた影響について紹介している。

京都大会の翌年、1961年の放送教育研究協議会で司会を務めたお茶の水女子大学教授・波多野完治は、「西本・山下論争」の根底の差異は、「子どもが教師や親たちなどの手助けなしに直接番組内容を理解可能であるかいなか、子どもたちがはたして自分たちだけで感動を教育目標にまで高める能力を持っているかいなかという児童観、教材観の違いである」としている。

こうした番組利用をめぐる論争は、VTR機器の普及によって録画再生、部分視聴、選択視聴が技術的に可能になった70年代に、「『放送学習』vs『放送利用学習』」という形で再燃する。

放送の持つ直接教授性を重視し、放送それ自体が一つの教育活動であるとする「放送学習」と、放送も教育手段の一つであり、教師が授業の目的に合わせて番組を選択、事前視聴して必要な部分を利用する「放送利用学習」についての論争は、雑誌『放送教育』で1978年から誌上シンポジウムの形で掲載されている。

一方で、こうした二者択一的に放送教育をとらえることに対する批判や、固定的な放送教育論が現場と遊離しているという批判も生まれる。

この時代には、メディア・リテラシーの考え方につながる、放送についての学習、放送から情報を得る能力の育成に関する研究も進められた。また教育工学の考え方に即した、教育目的と学習者の条件を特定して、その中での授業の最適化のための放送番組利用研究も生まれ、80年代以後の研究につながっていく。

II-6 小括

教育テレビが開局する1959年から1970年代の学校放送番組の歴史から読み取れることを、3点指摘したい。

1点目は、ラジオ学校放送番組に比べてテレビ学校放送番組は比較的スムーズに放送が始められたことである。ラジオの時代は逋信省と文部省の対立もあり、ラジオ放送開始からラジオ学校放送開始までに10年の歳月を必要とした。しかしテレビ学校放送はテレビ放送開始と同時に始まり、6年後の教育テレビ開局とともに、放送時間を拡大していくことになる。

この背景には、戦後の新教育にあたって文部省が学校放送番組を含む視聴覚教材を取り入れていく姿勢をみせたことや、「一億総白痴化」という言葉に代表されるテレビ批判に対して、テレビの教育的機能を打ち出そうという論調が高まったことが挙げられる。

2点目は、システムとしてのテレビ学校放送番組を支える仕組みが早い段階からできていたことである。番組制作の全体方針を決める「視聴覚教育研究委員会」と、番組に出演する教科専門の教師、そして放送利用研究を行う全国放送教育研究会連盟（全放連）と理論的な研究を行う「日本放送教育学会」という仕組みの中で、番組制作者は計画的に番組を制作できるようになっていた。

3点目は、学校放送番組に対する期待は多くの教師や研究者にあったものの、その利用方法についてはさまざまな論争が行われてきたことである。放送の内容ではなく、放送の利用方法についての議論はこのあとの時代も続くこととなる。

教育テレビ開局のころの授業を描く 番組『山の分校の記録』

放送1959.11.3 第1部50分

1960. 3.22 第2部65分

1960.5.5 総集編60分、いずれも総合テレビ



『山の分校の記録』は栃木県塩谷郡栗山村（現在の日光市）土呂部の分校に、テレビがやってきてからの1年間の子どもたちの変化を追いかけたドキュメンタリー番組である。

31人の子どもたちは、テレビ学校放送番組が映し出す外の世界に瞳を輝かせ、学習意欲を高めていく。そして最後には『テレビの旅』という社会科番組の形式で、自分たちの町の暮らしの問題点を地域の人に発表するまでに変容していく。

番組を制作した小山賢市は、「私たちの課題は、巷間に「一億総白痴化」と言われたところのものへの反論であり、今後のテレビの方向を探し出すことであり、教育の場におけるテレビ教材の位置づけとその価値を知ることであった²⁵⁾と制作意図を語っている。

この番組は1960年9月に、放送界で最も権威のあるコンクールといわれるイタリヤ賞で第2位に入賞。その後も教育テレビの周年記念などで何度も再放送され、学校放送番組の利用のあり方のモデルの一つとなっている。



放送教育の隆盛と転機 (1980～90年代)

1980～90年代の社会状況・教育政策をみると、「増税なき財政再建」を掲げる第二次臨調の提言をもとに、行政改革・税制改革・教育改革が推進された改革の時代といえる。民間の活力を促すための大胆な制度改革が行われ、日本電信電話公社、日本専売公社、日本国有鉄道は分割・民営化されてNTT、JT、JRが誕生する。教育現場では臨教審により示された「教育の自由化」に関する議論が沸き起こった。

1990年代の初めはバブル景気と呼ばれる好況が続いたこともあり、有効求人倍率も急増、民需増加とともに、官民共同の第三セクターも

数多く誕生した。また、女性の社会進出が増加するとともに、1985年には男女雇用機会均等法が成立、女性の大学進学率も増加していく。

放送技術・メディア環境をみると、カラーテレビの世帯普及率は100%近くとなり、マスメディアの中心として大きな社会的影響力を持つようになる。次世代のテレビとして「高品位テレビ」、ハイビジョンも誕生、地上波に加え衛星波による放送も始まりチャンネル数が増えていく。

同時にこの時期、VTRが広く一般に普及していく。番組制作では小型のVTR一体型カメラによる機動的なロケが容易になった。また、ベータ vs VHSの「ビデオ戦争」により、家庭用のビデオデッキが普及していく。

テレビは「生で放送番組を見る」だけでなく、「放送番組を録画して見る」「市販のビデオを見

表10 教育テレビ60年 学校放送番組関連年表3 (1980～1999)

年	社会状況・教育政策	放送技術・メディア環境
1980～ (昭和55～)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で77年改訂学習指導要領実施 (80.4) ・第2次臨時行政審査会発足 (81.3) ・文部省「視聴覚教育課」を「情報教育課」と改称 (84.7) ・臨時教育審議会(臨教審)発足 (84.8) 	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ音声多重放送、本放送開始 (82.12) ・衛星第1放送開始 (84.5)
1985～ (昭和60～)	<ul style="list-style-type: none"> ・男女雇用機会均等法成立 (85.5) ・臨教審第一次答申 (85.6) ・NTT、JT民営化 (85) ・臨教審第二次答申 (86.4) ・バブル景気 (86～91) ・臨教審第三次答申 (87.4)、第四次(最終)答申 (87.8) ・文部省、社会教育局に変わり生涯学習局設置 (88) 	<ul style="list-style-type: none"> ・放送大学開学 (85.4) ・文字多重放送開始 (85.11) ・衛星第2放送開始 (86.12) ・(株)NHKエデュケーショナル設立 (89.5) ・衛星放送本放送開始 (89.6)
1990～ (平成2～)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校で89年改訂学習指導要領実施 (92.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育テレビで「母と子のテレビタイム」を夕方の時間帯に設定 (90.4) ・家庭用VTRの普及率66.8%に (90) ・ハイビジョン放送開始 (91.11)
1995～ (平成7～)	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神淡路大震災 (95.1) ・地下鉄サリン事件 (95.3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「NHKオンライン」公開 (95.10)

る」ものに変容していく。

この傾向は、家庭よりも早くVTRが普及した学校現場、特に中学や高校でみられ、録画利用することで、番組をアーカイブとして保存して、必要な部分だけを見せるようになっていく。そのため番組編成も、録画利用も考えたものに変容していく。

新学力観が示された時代、番組内容も、学年別・教科別・校種別の番組だけでなく、幅広い対象に向けて、環境や国際理解など、新しい課題に対応した番組制作が進められる。

この時期、学校放送番組の利用率は増加、小学校では97%にまで達するが、番組の生利用だけでなく録画利用、丸ごと視聴だけでなく部分視聴、そして、シリーズとしての視聴ではなく必要な部分だけの視聴などの利用形態が

生まれ、「ナマ、丸ごと、継続」という放送教育の考え方も転機を迎える。

学校へのコンピューター導入も進む中、新たな放送番組の利用研究として、「メディア・ミックス利用」という考え方が生まれ、インターネット時代への準備が進められた。

表10に示すように番組利用が隆盛を極めるとともに、次の時代への準備が進められた20年をみる。

- Ⅲ-1 「ゆとり教育、個性化教育」への取り組み
- Ⅲ-2 テレビの高画質化とVTRの普及
- Ⅲ-3 学校種対応の編成、録画利用への対応
- Ⅲ-4 総合学習番組への取り組みと特別シリーズ
- Ⅲ-5 視聴能力に関する研究とメディア・ミックス利用の始まり
- Ⅲ-6 小括
- <コラム マルチメディア教材『人と森林』>

番組編成／番組内容	番組利用・番組研究
<ul style="list-style-type: none"> ・中学校向け「特別シリーズ」開始 (80.4) ・小学校向け番組の15分化始まる (80.4) ・高等学校向け「特別シリーズ」開始 (81.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本教育工学会設立 (84.11)
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校中学年・総合学習番組『にんげん家族』放送開始 (85.4) ・中学・高校向け「年間シリーズ」終了 (86.3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第40回放送教育研究会全国大会 (広島) で、初めてハイビジョン番組の公開授業 (中学校) (89.11)
<ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校向け「ステップ&ジャンプ」放送開始 (90.4) ・小学校理科番組が『理科教室』から『はてな』シリーズに順次移行 (90～) ・DBC (Database for Children) プロジェクト始まる (93～95) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第41回放送教育研究会全国大会 (東京) で『人と森林』を利用した公開授業 (90.11) ・第43回放送教育研究会全国大会 (和歌山) で、ハイビジョン放送で教育番組の生視聴による公開授業 (92.11) ・第44回放送教育研究会全国大会 (仙台) で、ハイビジョンと情報データベースを使った公開授業 (93.10) ・「日本視聴覚教育学会」と「日本放送教育学会」が統合し、「日本視聴覚・放送教育学会」設立 (94) ・第45回放送教育研究会全国大会 (愛知) で、パソコン通信による学校間交流学習 (95.10)
<ul style="list-style-type: none"> ・「学校放送オンライン」公開 (96.4) ・環境教育番組『たったひとつの地球』が学校放送初のウェブサイトを開設 (96.4) ・中学・高校向け番組が総合学習型番組『スクール五輪の書』と、基本学習情報提供型番組『10min.ボックス』になる (97.4) ・『たったひとつの地球』が交流学習をベースにした『インターネットスクールたったひとつの地球』にリニューアル (98.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第48回放送教育研究会全国大会 (岡山) で全国大会の定期的な地方開催が終了 (97.11) ・「日本視聴覚・放送教育学会」が「日本教育メディア学会」に名称変更 (98)

Ⅲ-1 「ゆとり教育、個性化教育」への取り組み

1984年、「戦後教育の総決算」というスローガンのもとに「臨時教育審議会」（臨教審）が設置された。

それまでの教育行政は文部省による中央審議会が中心となり、10年に一度改訂される学習指導要領が教育の方向性を示していたが、総理大臣の諮問機関である臨教審のもと、長期的な展望に立った教育改革が行われることになる。

臨教審の審議は4つの部会に分かれて行われたが、特に第一部会「21世紀を展望した教育のあり方」と第三部会「初等中等教育の改革」が「教育の自由化」について対立した。

「教育の自由化」とは、臨調・行革の延長として、学校に対する規制を排除し、学校の設立や教育内容などを自由化することである。例えば学校選択を保障することで市場原理を導入し、学校教育の活性化と質の向上をもたらしとした。これに対して、「教育の機会均等の保障や教育水準の維持のために国家的な規制が必要である」という議論や、「学校への競争原理の導入は受験競争の激化や学校教育の荒廃をまねく」といった批判がなされ、活発な議論が行われた。

結局、1985年に提出された第一次答申では「教育の自由化」の色合いが強かったが、1987年に提出された第四次（最終）答申では、改革の基本的な考え方が「個性重視の原則」「生涯学習体系への移行」「変化への対応（国際化、情報化）」の3点に集約され、自由化論は個性重視という形に収斂していった。

第四次（最終）答申で「生涯学習体系への移行」と合わせて、文部省の政策形成機能の強化が指摘されたこともあり、1988年、文部省

の筆頭部局として、社会教育局に代わる生涯学習局が設置される。生涯学習を担う部局が筆頭部局となったことは、人が学校教育の期間だけではなく、生涯にわたって学び成長する姿が強く示されたといえる。学校放送番組に関わってきた視聴覚教育課も学習情報課として生涯学習局に移行、生涯学習時代のメディア教育のあり方が考えられるようになる。

学習指導要領もこの時期に大きく転換する。1980年施行の学習指導要領では、初めて教科の学習内容が削減された。各教科などの目標・内容を絞り、「ゆとりある充実した学校生活」が目指された。土曜日の隔週休日、完全週休2日制への移行なども進められる。

続く1992年施行の学習指導要領では、教科の学習内容がさらに削減されるとともに、臨教審の答申も踏まえ、「個性をいかす教育」を目指す「新学力観」が登場する。知識や技能中心の学力観ではなく、学習過程や変化への対応力の育成などを重視するものである。小学校低学年の理科・社会を廃止して、具体的な活動や体験を通して自立への基礎を養うことを目指す新教科「生活科」も設置された。

新学力観では児童・生徒の思考力や問題解決能力などを重視し、評価についても「関心・意欲・態度」を重視、教師の役割も「指導から支援・援助への転換」が目指された。

一方で新学力観に対しては、「基礎・基本を軽視しているため、学力低下の原因となっている」「関心・意欲・態度の客観的評価は困難で、授業での挙手回数などの形で関心・意欲・態度を測ることになり、新たなゆがみを生んでいる」などの批判も生まれた。

学校放送番組もこうした時代背景のもと転換期を迎える。

Ⅲ-2 テレビの高画質化とVTRの普及

カラーテレビの世帯普及率がほぼ100%になった1980年代は、衛星波によるチャンネル増、テレビの高画質化、放送サービスの多様化、そしてVTRの普及が進む時代である。

地上放送は付近に送信所がなければ受信できないが、人工衛星から電波を送れば、一挙に広い範囲に対して通信や放送ができる。衛星放送によって日本中にあまねく放送を届ける構想は1960年代に生まれ、1984年に世界初の本格的な衛星放送（衛星第1放送）が日本で始まる。1986年には衛星第2放送で、山間部や離島等の難視聴地域に総合テレビや教育テレビの番組を時差編成で放送した。

その後の衛星放送は難視聴解消としての役割を終え、地上放送ではできないような専門性の高い番組を提供するなど、チャンネルを増やすことが主な目的となるが、2010年度までは難視聴解消のために学校放送番組の放送が続けられていた²⁶⁾。

1991年には、NHKが開発を進めてきた、従来のテレビよりワイド・大画面・高精細の「高品位テレビ」ハイビジョンの放送が始まる。NHKと在京民放局などによる「ハイビジョン推進協会」が1日8時間の放送を行った。この時期の放送はスポーツ中継や自然・美術のドキュメンタリーが多かったが、小学校向け国語番組『おはなしのくに』などの学校放送番組もハイビジョンで放送された。

放送のサービスを多様化させる技術開発も進んだ。1978年に音声多重サービスが始まり、ステレオ放送やニュースの2か国語放送が広がっていく。1985年にはハイブリッド伝送方式による文字放送の本放送が始まり、ニュースや天気、

生活情報とともに、字幕放送も広がり、聴覚障害者だけでなく、文字から情報を得たい人の要望に応えた。

1980年代はまた、VTRが普及する時代でもある。1970年代には3/4インチ幅のカセットテープを使用するUマチック方式のカメラがあったが、これは撮影時にカメラマンの後ろにVTRをかつぐ要員が必要であった。1980年代以後に1/2インチVTRを組み込んだ一体型テレビカメラが登場、機動性・速報性が飛躍的に増し、ENG（Electronic News Gathering）システムが広がっていった。

家庭におけるVTRは、ソニーのベータと松下電器のVHSの「ビデオ戦争」のもとで普及が進み、1980年に2.4%の世帯普及率が、1990年には66.8%となる²⁷⁾。

ビデオデッキの普及でテレビは「生で放送番組を見る」だけでなく、「放送番組を録画して見る」「市販のビデオを見る」ものへと変容していく。

実は、VTRの普及は家庭よりも高校を中心とした学校のほうが早かった。

NHK文研の調査によると、高校では1970年代後半、中学校や小学校でも1980年代にはVTRの普及率が80%を超える。特に高校では、カラーテレビの普及よりもVTRの普及が先行したのが特徴的である。

中学校や高校は教科担任制で、授業時間が異なる複数の担当クラスを持つため、生放送の学校放送番組をすべてのクラスの授業で利用することは難しい。録画機器を利用することで初めて利用が容易になったのである。

VTRの普及が進むと、中学校や高校では番組をアーカイブとして保存して、必要な部分だけを見せるようになり、番組編成や番組利用に大きな影響を及ぼすようになる。

Ⅲ-3 学校種対応の編成、録画利用への対応

1980～90年代、学校放送番組は少しずつ放送時間が減少していく。1980年には毎週29時間程度であったが、1990年代末には毎週20時間程度となる。転換期を迎えたこの時期の学校放送番組の編成の変容を3点に整理してみる。

まず1点目は「中学・高校向け番組」の「特別シリーズ」編成への移行である。

1986年度の学校放送番組時刻表(表11)では、それまで中高合わせて7枠あった放送時間枠が午後0時台からの5枠に減少している。理科・社会で学年別・単元別に年間35～40本で編成されていた『理科教室中学校』や『わたしたちの歴史』などの番組は順次廃止され、中学校向け番組は1985年、高校向け番組は1986年から「特別シリーズ」として、『理科第1分野』『理科第2分野』などを放送するようになる。

「特別シリーズ」では番組の年間放送回数も20本化され、20本のシリーズや15本と5本のシリーズを組み合わせて編成された。例えば中学校『日本地理』の20本は、「国土と自然環境」「都市とくらし」「地域のくらしと工業」「地域のくらしと農業」「地域のくらしと漁業」などの5シリーズが、4本ずつの番組で構成された。また、体育や書道、技術家庭など、それまで放送されなかった教科番組を5本の小シリーズとして放送するなど、柔軟な編成が行えるようになった。

この背景には、中学・高校での録画利用の増加がある。VTRデッキの普及により、中学・高校での番組利用は増加したが、その結果、毎週継続してシリーズ番組を視聴するよりは、必要ときに必要な部分だけを見せる教師が増えることになった。そのため録画しやすいように

再放送の回数を増やすとともに、各教科の単元内容をすべて盛り込んだ番組ではなく、映像の効果が高いと考えられる部分をコンパクトにまとめた番組が求められるようになる。また、編成の都合で放送が難しかった多様な教科の番組への要望に応える形で、体育などの番組が放送されるようになった。

この時代の編成の特徴の2点目は、1980年から本格的に始まる小学校向け番組の15分化である。中学・高校より5分短い45分の授業時間の小学校に合わせた編成としたのである。

1970年代までの学校放送番組の編成は、小中高とも20分×35～40本のシリーズで進められていたが、学校種により異なるニーズに対応する方向に変容していったといえる。

3点目は、教育テレビ全体の生涯学習波としての性格を色濃くする中での番組編成の変化である。すでに1982年の編成で学校放送番組の減少、生涯学習番組の増加がみられたが、1990年代になると、教育テレビ開局以来常に最多の放送時間であった学校放送番組に代わり、語学番組や趣味実用番組などの生涯学習番組の放送時間が最多になる。また、家庭で子どもたちが視聴する幼児番組の放送時間も増加、1990年には夕方時間帯に「母と子のテレビタイム」が設定される。こうした「ゾーン編成」²⁸⁾の考え方は、その後の教育テレビの編成手法として拡大していく。

こうした状況の中、学校放送番組は他の番組より早くハイビジョン番組に対応したり、インターネットへの展開を進めたりするなど、デジタル放送の時代を見据えた番組制作を進めていくようになる。

表11 1986年4月 教育テレビ学校放送番組時刻表

対象	時間	曜日					
		月	火	水	木	金	土
小学校 低学年	午前 9:00～9:15	理科教室 小学校2年生	理科教室 小学校1年生	(再)おとぎのへや (国語)	(再)それいけノ ンタック (1年社会科)	(再)大きくなる子 (道徳)	(再)ワンツー・ どん (1年音楽)
幼稚園 保育所	午前 9:15～9:30	(再)みてごらん	(再)にんぎょう げき	(再)できるかな	(再)おーい! はに丸	(再)なかよし リズム	(再)ばくさんの かばん
小学校 低学年	午前 9:30～9:45	それいけ ノンタック (1年社会科)	大きくなる子 (道徳)	(再)はたらく ひとたち (2年社会科)	(再)理科教室 小学校2年生	(再)うたって・ ゴー (2年音楽)	(再)あんぜんノ バロール (低中学 年安全教育)
小学校 中学年	午前 9:45～10:00	わたしたちの くらし (4年社会科)	理科教室 小学校3年生	みんななかよし (中学年道徳)	(再)ふえは うたう (3年音楽)	(再)たんけん ぼくのまち (3年社会科)	(再)理科教室 小学校3年生
小学校	午前 10:00～10:15	ふえはうたう (3年音楽)	あいうえお (1年国語)	いちにの さんすう (1年算数)	みつめる目 (低学年総合)	(再)理科教室 小学校1年生	(再)さんすう すいすい (2年算数)
小学校	午前 10:15～10:30	たのしいきょうしつ (養護学校・障害 児学級)	いってみようやっ てみよう (養護学 校・障害児学級)	(再)たのしいきょう しつ (養護学校・ 障害児学級)	(再)いってみよう やってみよう (養護学 校・障害児学級)	(再)ゆかいな コンサート (4年音楽)	(再)あいうえお (1年国語)
幼稚園 保育所	午前 10:30～10:45	にんぎょうげき	できるかな	おーい!はに丸	なかよしリズム	ばくさんの かばん	みてごらん
小学校 中高学年	午前 10:45～11:00	理科教室 小学校4年生	(再)わたしたちの くらし (4年社会科)	(再)レポート につぼん (5年社会科)	(再)理科教室 小学校5年生	(再)理科教室 小学校6年生	(再)にんげん家族 (中学年総合)
小学校 (月～土)	午前 11:00～11:15	ワンツー・どん (1年音楽)	おとぎのへや (低学年国語)	うたって・ゴー (2年音楽)	(再)いちにの さんすう (1年算数)	(再)ことばの くに (2年国語)	(再)みつめる目 (低学年総合)
	午前 11:15～11:30	はたらくひとたち (2年社会科)	さんすう すいすい (2年算数)	あんぜんノバ ロール (低中学年安 全教育)	ことばのくに (2年国語)	(再)くらしの 歴史 (6年社会科)	(再)みどりの 地球 (高学年総合)
中学校 (土)	午前 11:30～11:45	たんけんぼくのまち (3年社会科)	にんげん家族 (中学年総合)	(再)理科教室 小学校4年生	(再)理科教室 小学校3年生	(再)みんななかよし (中学年道徳)	おもいっきり 中学時代 (特別活動)
	午前11:45～ 午後0:00	くらしの歴史 (6年社会科)	理科教室 小学校5年生	(再)理科教室 小学校6年生	(再)あしたへ ジャンプ (高学年道徳)	(再)レポート につぼん (5年社会科)	
中学校	午後 0:00～0:20	中学校特別シリーズ 世界地理 日本地理 (再)理科第1分野 (物理) (再)理科第1分野 (化学) (再)理科第2分野 (生物)					わたしの青春ノート (高等学校特別 活動)
高等学校	午後 0:20～0:40	高等学校特別シリーズ 生物 物理・化学 地学 地理 日本語・歴史					
	午後0:40～1:10						
中学校	午後 1:10～1:30	中学校特別シリーズ 理科第1分野 (物理) 理科第1分野 (化学) 理科第2分野 (生物) 理科第2分野 (地学) ハロー! コンピューター					
	午後1:30～1:35	ミクロの世界 (月・水・金), 心が輝いたあの日 (火・木)					
中学校	午後 1:35～1:55	中学校特別シリーズ 歴史I 歴史II (再)世界地理 (再)日本地理 公民・古典芸能					
	午後1:55～2:00	おもしろ漢字ミニ事典 (月・水・金), ばくの絵わたしの絵 (火・木)					
小学校 中高学年	午後 2:00～2:15	あしたへジャンプ (高学年道徳)	ゆかいなコンサート (4年音楽)	(再)理科教室 小学校5年生	(再)わたしたちの くらし (4年社会科)	(再)理科教室 小学校4年生	
	午後 2:15～2:30	理科教室 小学校6年生	レポートにつぼん (5年社会科)	(再)くらしの歴史 (6年社会科)	みどりの地球 (高学年総合)	(再)にんげん家族 (中学年総合)	
高等学校	午後 2:30～3:00	高等学校講座 日本の歴史 世界の歴史 古典への招待 科学と人間 世界・人とくらし					
幼稚園 保育所	午後 3:00～3:15	(再)なかよし リズム	(再)ばくさんの かばん	(再)にんぎょう げき	(再)できるかな	(再)おーい! はに丸	

注：NHK学校教育発行の『NHK学校放送1986』と『NHK年鑑』をもとに作成

Ⅲ-4 総合学習番組への取り組みと特別シリーズ

「ゆとり教育、個性化教育」が謳われ、VTR機器が学校に普及することで、授業での放送番組利用のあり方が変わってきた1980年代から90年代、制作者はどのようなことを考えて番組を制作してきたのだろうか。

転換期を迎えた学校放送番組について、この時期に番組形態が大きく変わった「中学・高校向け番組の変容」をまずみる。そのうえで「小学校向け教科番組の演出の変化」と、テレビ学校放送開始時から議論となってきた「系統主義」を重視した学年別の教科番組と、「経験主義」に重点を置く複数学年対象の総合番組がこの時代にどうとらえられていたかを考える。最後に、2000年代につながる、「放送を核としたメディア・ミックス」の展開を概観する。

中学・高校向け番組の変容

1980年『放送教育』2月号の巻頭言で、当時の学校放送番組班部長の西山昭雄は次のように述べている。「…そこで、われわれは数年にわたる調査研究を踏まえて、新しい問題提起をしたいと考えました。あえて問題提起と言いたいんですが、つまり、今までは小学校から高校まで、1つの理念で貫いていたのですが、校種によってこれは多様であってもいいのではないかと、つまり教育機器の普及や教材の多様化、あるいは利用実態ということ考えた時、『ナマ・継続・丸ごと』という理念というか哲学に併行して、中高においては、録音・録画による選択利用という実態から新しい考え方を見出し、これを理論的に裏づけていくことがむしろ実態に合うんじゃないかということです」。

こうした時代認識のもと、中学・高校向け番組

は1980年度から、番組制作の方針を大きく変えて、教科の内容を網羅的に扱う「年間シリーズ」と並行して「特別シリーズ」を開始する。そして1985年度をもって、すべての「年間シリーズ」が終了することになる。

「特別シリーズ」は当初、古典芸能、書写、技術、体育、美術といった、従来の番組で扱ってこなかった分野の番組も制作されてきたが、1986年度をもってすべて廃止。中学・高校とも特別活動向け番組を除くと、教科番組は理科と社会科に集約されていった。

中学・高校向け番組の変容の要因は、VTRの普及による録画利用の増加と合わせて、「資料性の高い番組」を求める教師の声が増えたこともある。1980年のNHK文研調査では、「資料性に富んだ番組」を期待する小学校教師が43.9%であるのに対して、中学校教師65.6%、高校教師67.3%と、中学校・高校教師で資料性に対する期待が高い。

1980年代は「放送番組の資料性」とは何かが雑誌『放送教育』などで議論される。その中で、学校放送番組の資料性とは、保存しておいて何度でも使える映像、わかりやすい絵解きだけを意味するのではなく、具体的な映像を通して知ることの満足感を味わい、さらなる疑問が浮かび学んでみたくなる映像であると、当時の制作者は考えていた²⁹⁾。

1990年度に中学・高校向け番組は再び大きく変容する。それぞれ20分の「中学特別シリーズ」「高校特別シリーズ」を、『ステップ&ジャンプ』(30分)として一本化、基礎的な内容を扱うステップ編(15分)と発展的な内容を扱うジャンプ編(15分)で構成したのである。従来から利用率の高かった理科、社会科、英語の3教科で制作された。

この背景には、高校進学率が100%近くにな

る一方で、生徒の学力差が広がり、中学校向けの内容のほうが利用しやすい高校が増えてきたことや、中学校でも分野によっては発展的な内容を扱いたいという要望が出てきたことがある。

この『ステップ&ジャンプ』への改編は好意的に受け取られ、特に高校の利用率は1990年代にやや増加した。しかし中学・高校向け番組の利用率は1984年の中学校(67.1%)、全日制高校(71.3%)をピークに徐々に下がる傾向は変わらなかった。番組の内容は好意的に受け入れられていたので、中学・高校を取り巻く状況が、「ゆとり教育」による授業時間の減少、コンピューターの導入、市販ビデオ教材やNHK一般番組の利用の増加へと変わっていったためであると考えられる。

1997年度に『ステップ&ジャンプ』は、資料性の高い教科番組『10min.ボックス』(10分)(理科、社会)と、総合的にさまざまな教科の内容を扱う『スクール五輪の書』(20分×5シリーズ)とに明確に分かれることになる。

そして1999年度に『スクール五輪の書』が終了、後継番組も2000年代になくなり、中高生向けの「経験主義」に重点を置いた総合的な内容を扱う番組の歴史は幕を閉じる。

こうした教科番組、総合学習番組とは別に、中学生や高校生が直接番組に参加する特別活動の番組も放送されていた。1970～80年代に放送された『中学生の広場』『中学時代』の流れを汲む『おもいっきり中学時代』(1985～89年)や、高校生のパソコン通信上での議論をもとに番組を展開する『ティーンズねっとわーく』(1994～95年)、『ハイスクール電脳倶楽部』(1996年)などである。

これらの番組は土曜日の日中に学校放送番組として放送されていたが、その後は形を変え

て青少年向け番組として夜の時間帯に放送されるようになっていく。

小学校向け教科番組の演出の変化

小学校向け教科番組も1990年代に番組の演出を大きく変えたり、新教科である生活科の番組が始まったりと変化していく。

教育をめぐる時代の変化という側面も大きいですが、この時期は1959年の教育テレビ開局時に数多く採用されたディレクターが定年または1989年に設立された株式会社NHKエデュケーショナルに転籍するようになり、その代わりに地方局勤務を経験せず東京初任の若いディレクターが番組を制作するようになった側面もあると考えられる。

1960年代から、系統学習・ダイレクト・ティーチングを意識して放送してきた小学校「理科教室」のシリーズも、変化を迎える。1984年から順次、テレビティーチャーが解説するスタイルから、例えば小学校6年生向け理科番組ではお兄さん・お姉さん役、小学校4年生理科番組ではお兄さんとロボットが現場に出ていくリポート番組の演出に変化していく³⁰⁾。

1990年になるとタイトルから「理科教室」というシリーズ名を外し、「はてな」シリーズとして、小学校3年から6年向けに放送を始める。6年生向けの『はてな・サイエンス』では、お兄さん・お姉さん役が生活や社会の現場に飛び出し、学習指導要領では触れられていないが子どもたちに人気の高い「恐竜」や、「スペースシャトルの打ち上げ」、「ハッブル望遠鏡」など最新の話も扱うようになってきた。

この時期の理科番組制作の変化として、放送作家が関わらなくなったことがある。それまでの小学校理科番組は年間35本を、基本的に2人のディレクターで制作。ロケをする週の翌週に編

集などの作業を行って番組を完成させ、その翌週はまたロケというスケジュールの合間に取材を行う、という体制であった。そのため番組の構成はディレクターが行うが、台本作成やシリーズ全体の構成は放送作家が担っていた。長く務める放送作家も多く、新しい担当者に理科番組の考え方を引き継ぐという側面もあったが、マンネリ化をもたらすという側面もあり、放送作家の起用を見直すこととなった。

この時期の小学校6年生向け理科番組の演出の変化を、長く理科番組を制作、NHK文研にも所属した佐野博彦は以下の6点に整理している³¹⁾。

1. 疑問の対象が「自然に見られる現象」から「社会の技術的現象」へと変化した。
2. 「なぜ」という疑問から出発していたのが、「どのように」という疑問へと変わっていく。
3. テレビ出演者が「調べて」報告する、教える、という方向に演出が進んでいった。
4. 現在形から過去形へ（ストレートから「間接」（客観）へ、より「媒介化」される方向へ）。
5. 要素を「組み合わせる」番組を構成していく。
6. テンポが速くなり、紹介する実験ごとの飛躍度が高まり、結果として一つ一つの実験は、「確認」（＝「情報」）の意味を示す比重が高まっていく。

こうした変化はこの時期、他の教科番組でもみられ、1990年代後半からのデジタル化と合わせて、まさに転機の時代となった。

総合学習番組の誕生と広がり

教科番組の変容と合わせて、この時期から複数学年対象の総合学習番組が広がっていった。すでに1969年から安全教育番組『安全教室』、

1975年に環境教育番組『みどりの地球』が始まっていたが、1980年に各地の小学校が教科外の時間に取り組んでいる内容を紹介する小学校中高学年向け『ひろがる教室』、1982年に小学校低学年向けに子どもたちの活動を描く『みつめる目』、1985年に幅広く「人間とは何か?」を考える『にんげん家族』、1993年に国際理解教育番組『世界がともだち』と、これまで扱ってこなかった題材を複数学年に向けて制作するようになった。

中でも『にんげん家族』は、それまでにないタイプの学校放送番組で、理科や社会科などの教科番組に比べると利用は多くなかったものの、全国の熱心な教師による実践が重ねられ、その後の番組制作のあり方にも影響を及ぼしている。

『にんげん家族』は、理科番組を制作してきたプロデューサーのもと、1984年の試作番組『人ってなあに?』の5本シリーズからスタートする。その1本「逃げろ子豚くん!」はクラスで大切に育ててきた子豚が出荷される日までを描き、命について、食べることについて考えるものであった。

この番組が制作された背景の一つに、1983年に起きた中学生による横浜浮浪者襲撃事件があった。当時の番組スタッフは「子どもの心の荒廃、空洞化をまざまざと見せつけられた思いがしました。こうした子どもの心の現実に向かって、何とかそこを耕して、少しでも柔らかく、水気のあるものにしようじゃないか。『にんげん家族』はこういう願いで始められたのです」と述べている³²⁾。

『にんげん家族』は、他の学校放送番組とは異なり固定のカリキュラムはなく、学期ごとに番組担当者の提案をもとに、外部の研究者や教員と内容を決めていくという点でも、他と異なって

いた。答えのない番組，1人1人がみんな違う意見を言える番組として，1994年から放送の『みんな生きている』に引き継がれ，学校放送番組の一つの大きな可能性を示した。

放送を核としたメディア・ミックス

1990年代は，教室にVTR機器だけでなくコンピューターの導入が進み始めた時代でもある。その中で学校放送番組はどうあるべきか，模索が続けられた。

当時の日本の教育メディア関係者に大きな衝撃を与えたのが，1984年にアメリカのバンクストリート大学が制作した『ミミ号の航海』である。小学校4年生から中学校2年生を対象に，クジラの生態調査を題材としながら科学的探究の過程を示すメディア・ミックス教材である。

メインストーリーであるテレビドラマ（15分×13本）を中心に，テレビドキュメンタリー（10分×13本），コンピューターソフト（4本），教科書，掛け図などが組み合わされ，放送番組によるストーリー性や動機づけと，コンピューターソフトなどの双方向性を組み合わせるマルチメディア教材の可能性を示した。

NHKでも，1990年11月の第41回放送教育研究会全国大会（東京）に向けて，最初のマルチメディア教材『人と森林』が小学校6年生を主な対象に開発された。テーマは環境問題で，中でも人間の生活と森林の関わりを取り上げた。

教材は，①高画質とサラウンド音響を駆使したハイビジョン番組『人と森林』（20分），②ハイビジョン番組画面をデジタル印刷したハイビジョン教科書，③番組を見たあとに発展学習をするマルチメディア教材，の3つから構成された。ハイビジョン番組で文脈や動機づけを与え，ハイビジョン教科書で定着させ，マルチメディア教材で自主的な発展学習をするという教材を目

指したのである³³⁾。

その後も，放送教育とコンピューターをどのように結びつけるのか，放送教育研究会全国大会に合わせて試行錯誤が行われた。

1993年の宮城大会では仙台市立福室小学校がハイビジョンと情報データベースを使った実践を展開し，1995年の愛知大会では豊橋市立羽根井小学校と横浜市立本町小学校のパソコン通信による学校間交流が行われ，その様子が特集番組として放送された。

また，1人1台のコンピューターとビデオを使い，未来の教室を考えた1992年度の港区神応しんおう小学校の実践にはNHKと東京大学が深く関わり，実践の様子が特集番組となり出版もされた³⁴⁾。

こうしてマルチメディア教材の開発が徐々に進められた背景には，放送教育の伝統を新しいメディアに生かしたいという変革の気運と，漸減する学校放送利用率への不安が相半ばする時代状況のもと，教育テレビ開局時から番組を制作してきた世代から，20代の平成採用世代まで，あらためて公共放送として学校教育にできることを模索していったことがある。1993年度から3年間進められたDBC（Database for Children）プロジェクトでは，学習者がテキストや動画などさまざまな情報をカード型ファイルに蓄積し，そのカードを自由に並べ替えプレゼンテーションするまでの一連の自主的・能動的な活動を支援することが目指された。また1996年には環境教育番組『たったひとつの地球』がウェブサイトを公開，1998年からは『インターネットスクール たったひとつの地球』として，学校間交流学習を推進，月に1回の生放送でその様子を紹介した。

こうした成果が2000年代に，放送のインターネット展開としての「NHKデジタル教材」，「NHK for School」へとつながっていく。

Ⅲ-5 視聴能力に関する研究と メディア・ミックス利用の始まり

1980年代から90年代の教室はテレビだけでなく、VTR機器やコンピューターが利用できる環境が広がり、市販のビデオやDVD、教育用のソフトウェアなどが授業で利用されるようになってきた。学校放送番組の利用も放送番組と他のメディアを組み合わせるメディア・ミックス利用が行われるようになる。

学校放送番組に関する研究も、授業での利用方法や教師の指導方法だけでなく、映像メディア全体の中での放送番組のとらえ方や番組利用のあり方という観点での研究が行われるようになってくる。

1984年設立の「日本教育工学会」、1994年に「日本視聴覚教育学会」と「日本放送教育学会」が統合した「日本視聴覚・放送教育学会」などで研究が進められた。

番組を見ている児童・生徒は映像をどのように視聴しているのか、子どもたちの「視聴記録をもとにした実践研究」や、研究者による「映像視聴能力の研究」、放送番組を中心に複数のメディアを組み合わせる「メディア・ミックスの授業実践や研究」、そして、映像視聴を含む「メディア・リテラシーの育成」という3点から番組の利用研究をみていく。

映像視聴能力に関する実践と研究

学校放送番組を見た子どもたち1人1人がどのように番組を視聴しているのか、視聴の結果どんな変化が子どもたちにあったのかを教師が知り、次の授業につなげるために、授業で番組を視聴したあとに視聴カードを書かせる取り組みが1970年代後半から80年代、教師の間に広がっていった。

視聴カードは下記のような項目で番組視聴後に子どもたちに書かせるもので、しだいに定型化されていった³⁵⁾。

- 1.この放送でいちばん強く心に残ったこと
(感覚面のとらえと変容)
- 2.この放送で大切だと思ったこと(思考面のとらえと変容)
- 3.やってみたいこと、もっと調べてみたいこと
(行動面のとらえと変容)

こうした視聴カードを利用することで教師が子どもたちの実態をつかみ、段階的にそのあとの授業を展開していくとともに、子どもたちも「番組を視聴する」「視聴カードを書く」「視聴後に話し合いをする」活動を通して、理解を深め、具体的な活動につながっていったという授業事例は、1980年代の学校放送教育賞入賞論文に数多くみられる。

また、このような視聴カードによる定型化をあえて行わず、子どもの内面から湧き出る反応を大事にして、視聴後に教師は発問をせず(「空発問」)、子どもたちの発言を板書で整理しながら、番組に対する子どもたちの多様な考えを共有していく場(「意味場」)をつくるという実践も、1982年の放送教育研究会全国大会埼玉大会で提案され、2010年代の今も埼玉の研究会で実践と研究が続けられている。

こうした教師の利用研究とともに、視聴能力とは具体的にはどのような要素で成り立っているのか、それは年齢により変わるものなのか、という研究も行われた。

すでに1960年代に多田俊文(NHK総合放送文化研究所)の研究で、オーバーラップによる過去の回想シーンは小学校中学年でも理解が困難な場合があること、シンボリックな映像は小学校低学年では理解しにくいことなどが述べられているが、こうした映像理解についての研究

がさらに進められた。

例えば恒川努は、学校放送の小学校3年生向け社会科番組『ぼくのまち わたしのまち』を小学校1年生から中学3年生まで9グループに視聴させて、「時間」の識別能力と、「空間」の識別能力の2つについてテストを行った³⁶⁾。

その結果、「時間」の識別については、過去の場合が番組からわかるのは小学校2年生からであること、回想場面を番組に出てきた順序に並べ替える能力は小学校5年生から急速に発達すること、重要場面を写真の中から指摘できる能力は小学校3年生で80%は育っていることなどを報告している。また「空間」の識別については、テレビから方位が識別できるようになるのは、小学校3年生からだとしている。

こうした研究から、テレビの映像は見せるだけで子どもにわかるものではなく、子どもの発達段階に応じて映像理解が異なるので、番組制作者も教師もそのことを念頭に置いて番組制作や授業を行う必要があることが明らかになった。

メディア・ミックス利用に関する実践と研究

メディア・ミックス利用についての研究は、学校放送番組の制作に深い関わりを持った水越敏行(当時は大阪大学)を中心に進められていった。水越はメディア・ミックスを、「個々の刺激体、要素としてのメディアムをある意図のもとに組み合わせ、重ねることによって、単品の刺激体、単一メディアでは期待し得なかった新しい質の刺激を創り出そうとするところにある」として、4つのタイプに分類している³⁷⁾。

- ①主幹メディアと副次メディアが、基本的に同質の情報であって、補い合う関係をなす場合。(相補型)
- ②最終的には同じねらいを持つのだが、視点を離れた別の角度からの情報を提供する

場合。(視点変更型)

- ③主幹メディアで提示した情報の逆、ないしは結論の違う情報を、副次メディアで示す場合。(ゆさぶり型)
- ④主幹メディアの中から、一部分に注目し、それを拡大し深化し、発展させていく場合。(部分発展型)

特に「相補型」と「ゆさぶり型」の実践事例が多いとしている。

「相補型」は例えば環境教育で、自動車の排気ガスに関する放送番組(映像資料)を見たあとに、酸性雨に関する読み物資料を加え、大気汚染に関して学習を進めていくというものである。メディアが異なっても資料相互に矛盾はない。それに対して「ゆさぶり型」の授業は、例えば社会科で都市部から地方の寒冷地への工場移転について扱う映像資料から、工場の敷地拡大、職住近接などの情報を読み取ったうえで、地方の生活の実際、冬の天気や積雪量、都会より少ない電車やバスの運行本数などの文字資料を示して「ゆさぶり」をかけるというものである。工場で働く人だけでなく、その家族も含めて、寒冷地への工場移転とはどういうことなのか、深く考えていく。

こうした形で放送番組とさまざまなメディアを組み合わせて利用した授業実践が全国で行われ、その研究成果の報告が行われていく。

特に1997年の放送教育研究会全国大会岡山大会で授業公開された、岡山市立平福小学校での環境教育番組『たったひとつの地球』を中心とした三宅貴久子の6年生の授業実践は、その後の「総合的な学習の時間」の授業実践にも大きな影響を及ぼすものとなった。

この実践の様子は『見つめる・かかわる・伝える～インターネット時代の総合学習と放送～(1997年11月16日午後4:00～午後5:15)』とし

て放送されている。

授業は瀬戸内海に注ぐ一級河川「旭川」の最下流域にある「旭川地域」を中心に、「水学習」をテーマに行われた。子どもたちはふだん、何げなく使っている水について、班ごとに徹底的に掘り下げていく。その授業の要所所で、あらためて方向性を確認したり、新たな視点を獲得したりするために、学校放送番組『たったひとつの地球』が活用された。さらに、当時学校現場に入ってきたばかりのパソコンとインターネットを利用して、調べ学習や他地域との交流学习を進めていった。

放送番組の継続視聴や番組からの発展学習という放送教育の伝統を踏まえつつ、インターネットによる交流学习を統合した実践を行ったのである。

こうした学校放送番組の視聴とインターネットを組み合わせた番組制作、授業実践は2000年代に本格的に広がっていく。

メディア・リテラシーの育成を目指した研究

「メディアによる教育」についての研究ではなく、「メディアについての教育」の研究も1980年代に進んでいった。

もともと、1930年代のラジオ学校放送当初のねらいにも、「ラジオを如何に聴取するかの教育、ラジオを如何に批判するかの教育、ラジオを如何に利用するかの教育」が学校教育の将来に重要である³⁸⁾と指摘されており、メディア・リテラシーの考え方は当初からあったといえる。

全放連が放送教育研究会と合わせて、中学・高校のNHK杯放送コンテスト³⁹⁾を活動の中心に置いているのも、授業での学校放送番組の利用と合わせて、校内放送活動をメディア・リテラシーの実践として位置づけ、情報発信としての放送活動の発展を重視してきたためである。

メディア・リテラシーの育成に関する研究は1980年代に東京工業大学の坂元昂を中心に進められた。坂元はメディアによるコミュニケーション能力、メディア・リテラシーを育てるのがメディア教育であるにとらえ、この能力を3つの観点で整理した⁴⁰⁾。

1. 「受け手としてのメディア教育」
ーメディアの特性を理解し批判する能力
2. 「使い手としてのメディア教育」
ーメディアを選択し利用する能力
3. 「作り手としてのメディア教育」
ーメディアを構成する能力、メディアを制作する能力

さらに、この3観点を低学年、中学年、高学年と発達段階に分けて整理した。こうしたメディア教育を意図したカリキュラムは、2000年代に放送の学校放送番組『体験!メディアのABC』をはじめとするメディア・リテラシー教育番組につながっていく。

1980～90年代は、学校放送番組の利用が隆盛を極める一方、学校のメディア環境の変化が進む中、より包括的、根源的な研究が進んでいった。

Ⅲ-6 小括

1980～90年代の教育テレビと学校放送番組について、3点にまとめる。

1点目は教育テレビの放送波としてのあり方の変化である。1990年度のNHKの番組編集基本計画では「教育テレビジョンの抜本的刷新」「教育テレビは生涯学習チャンネル」と明記されるようになる。学校放送番組の放送時間もこの時期から減少していく。

その一方で、幼稚園・保育所向け番組とは別に、朝の午前7時台と8時台、夕方の午後4時台と5時台に、家庭での視聴を考えた『ひとりのできるもん!』や『母と子のテレビ絵本』などの幼児向け番組が編成されるようになる。また、中高生向けの総合学習番組は青少年向け番組に形を変えていく。

学校放送番組は小学校中心の制作がさらに進み、幼児、中高生は生涯学習の中に位置づけ直されたとも考えられる。

2点目は学校に新しいメディアが入ることで、教育テレビ、学校放送番組というメディアの意味の再考が迫られたことである。録画機が入ることで、時差再生と部分再生が可能になり、「必要なときに必要なものだけ見られる」メディア環境となった中、放送波で送る学校放送番組にはどんな役割があるのかを考えなければならない転機の時期を迎えたのがこの時代である。

3点目は、そうした新しいメディアへの可能性に向けた番組制作や授業実践、研究が先行的に行われてきたことである。学校放送番組制作を支える教師や研究者によるシステムが機能したともいえる。メディア・ミックス利用に関するさまざまな試みはインターネット時代に確実につながっている。

NHK初のマルチメディア教材 『人と森林』を利用した授業

『大地に緑を心に輝きを
-第41回放送教育研究会全国大会-』

放送1990.11.11 総合テレビ54分



マルチメディア教材『人と森林』は、放送教育に長く関わり、理科番組の番組委員でもあった鈴木勢津子教諭（東京都大田区立山王小学校）が担任する6年生のクラスに先行的に導入された。

ハイビジョン番組の『人と森林』を見た子どもたちは、人間と森との関係を描く100以上のクリップ映像が入ったレーザーディスクと、映像と連動しながら双方向に学習できるコンピューターソフトで番組視聴後に感じた疑問や好奇心に沿って、学習を進めた。そして、自分で撮影したビデオ映像を編集して映像リポートをつくった。

森への思いを編集した映像リポートはNHKホールを会場とした放送教育研究会全国大会の公開授業で発表され、その様子が特集番組として放送された。

鈴木教諭は、マルチメディア学習システムにより、子どもたちの進度や課題に応じて学習が個別にできること、自分たちで簡単に映像リポートをできることで学習がより深く発展するとした⁴¹⁾。

双方向の発信はマルチメディア利用のあり方の一つとして、その後に影響を及ぼすことになる。

IV

放送とインターネットとの連動 (2000年以後)

バブル崩壊後から2000年代は、「失われた10年」あるいは「失われた20年」と呼ばれる経済低成長の時代となる。2011年3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の発生、2016年の熊本地震などの災害も相次いだ。

グローバル化が進む一方で、2000年以降のノーベル賞自然科学部門で日本人受賞者が急増して、日本の科学技術教育の成果が認知されたり、2020年のオリンピック東京招致が決定したりするなど、世界の中の日本が意識される時代にもなってきた。

変化が激しく、予測不可能なことが次々と起

こる時代、グローバル化が進展する時代、AIとの共存が求められる時代にどのような教育をしていくのか。2000年代は、1947年の公布・施行以来約60年間、条文の変更が一切されなかった教育基本法が2006年に改正されるなど、教育行政も大きな転換点を迎えた。

2018年には狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く新たな社会 Society 5.0 に向けて「学びのあり方の変革」が打ち出されている⁴²⁾。

放送技術・メディア環境の面で見ると2000年代の始まりをデジタル放送の開始で迎えるとともに、2020年の東京オリンピックを目指して、2018年4月から「ハイビジョン」を超える超高精細映像の「スーパーハイビジョン」(4K・8K

表12 教育テレビ60年 学校放送番組関連年表4 (2000～)

年	社会状況・教育政策	放送技術・メディア環境
2000～ (平成12～)	<ul style="list-style-type: none"> ・小淵内閣「教育改革国民会議」設置 (00.3) ・「21世紀教育新生プランーレインボープラン」(01.1) ・OECD実施の「生徒の学習到達度調査 (PISA2000)」の結果公表 (01.12) ・OECD実施の「生徒の学習到達度調査 (PISA2003)」の結果公表 (04.12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・BSデジタル放送開始 (00.12) ・地上デジタル放送開始 (03.12) ・NHKデータオンライン開始 (04.4)
2005～ (平成17～)	<ul style="list-style-type: none"> ・安倍内閣「教育再生会議」設置 (06.10) ・「教育基本法」改正 (06.12) 	<ul style="list-style-type: none"> ・携帯端末向け地上デジタル放送「ワンセグ」開始 (06.4) ・デジタル放送録画運用新ルール「ダビング10」開始 (08.7) ・NHK オンデマンド開始 (08.12)
2010～ (平成22～)	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災 (11.3) ・安倍内閣「教育再生実行会議」設置 (13.1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・衛星第2放送終了、衛星波での学校放送終了 (11.3) ・ハイブリッドキャスト開始 (13.9)
2015～ (平成27～)	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」公表 (18.6) 	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーハイビジョン放送開始 (18.4)

の総称)が放送を開始している。

また急速に普及するスマートフォンやタブレット端末に向けてインターネットで配信をするサービスも、順次進められている。

2001年にインターネットで番組や関連する動画クリップなどが見られる「NHKデジタル教材」がスタートしたことにより、学校放送番組の番組編成も大きく変容する。中学・高校向け番組は録画利用がしやすい深夜の時間帯に移行、小学校向け番組は10分化が進み、放送時間が減少する一方、図工や家庭科など、それまで番組化されてこなかった実技系統の番組などが放送されるようになり、インターネット配信も含めた番組シリーズ数は60年間で最多となる。

番組内容も多様化する。番組と動画クリップを組み合わせる授業ができるようになったことも

あり、番組の位置づけが変化して、オープンエンドの番組やセグメント型の番組など、多様な演出の番組が生まれる。

放送番組とインターネット上のデジタル教材を組み合わせる授業に利用するのか、放送番組の利用研究もタブレット端末での番組活用など多様な取り組みが進んでいる。

表12に示すような多様化する時代をみていく。

- Ⅳ-1 「生きる力」と「社会に開かれた教育課程」
 - Ⅳ-2 放送のデジタル化とネット連動
 - Ⅳ-3 放送回数、番組時間数の柔軟化
 - Ⅳ-4 「オープンエンド」「セグメント」の進展
 - Ⅳ-5 情報教育、視聴覚教育と放送教育
 - Ⅳ-6 小括
- <コラム デジタル教材 『おこめ』 >

番組編成／番組内容	番組利用・番組研究
<ul style="list-style-type: none"> ・「NHK デジタル教材」プロトタイプ『里山』を公開 (00) ・「NHK デジタル教材」公開 (01.4) ・『学校デジタルライブラリー』放送 (04.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・全放連、研究プロジェクトを開始 (00) ・『放送教育』休刊 (00.10)
	<ul style="list-style-type: none"> ・「デジタル放送教育活用促進協議会」設立 (05.4) ・「先導的教育情報化推進プログラム」(07～09)
<ul style="list-style-type: none"> ・NHKの学校教育サービス全体のポータルサイト「NHK for School」を公開 (11.4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省「学びのイノベーション事業」を開始 (11.4)
	<ul style="list-style-type: none"> ・「すくレポ!」 「NHK for School アワード」開始 (15)

IV-1 「生きる力」と「社会に開かれた教育課程」

2001年、中央省庁再編により、文部省と科学技術庁が統合して発足した文部科学省は、「21世紀教育新生プランーレインボープランー〈7つの重点戦略〉」を決定する。その中には確かな学力の向上のため、学力向上フロンティア事業、全国的な学力調査、少人数指導を可能とする教職員定数の改善、中高一貫教育の推進、教員の10年次研修の制度化などの具体的な施策が示されている。

このプランのもとになったのは、2000年に設置された「教育改革国民会議」である。1980年代の臨教審に続いて2000年代は、首相直属の諮問機関として「教育改革国民会議」「教育再生会議」「教育再生実行会議」が設置された。こうした機関は法令上の根拠を持たないことから批判もされているが、さまざまな提言を続けている。

その一方で中教審に対しては「新しい教育基本法の在り方」が諮問され、2006年の教育基本法の改正につながっていく。教育基本法の改正により、教育の目標（第2条）として5本の柱が掲げられ、「豊かな情操と道徳心」「公共の精神」などが盛り込まれた。また、「生涯学習の理念」（第3条）が新たに規定されている。

この時期の学習指導要領をみていくと、まず2002年施行の学習指導要領で「生きる力」の育成、生涯学習社会への移行が宣言された。完全学校週5日制の実施とともに、教育内容の厳選として時数全体の3割削減が進められるとともに、学校・教師の裁量の大きい「総合的な学習の時間」が新設される。

しかし同時期にOECDによる生徒の学習到達度調査「PISA2000」の結果が明らかとなり、

いわゆる「学力低下論争」が巻き起こる。続く「PISA2003」でも日本の学力は国際的に全体として上位ではあるが、読解力が低下傾向であるという結果となり、「ゆとり教育」見直しの声が高まる。

こうした中、2011年に施行の学習指導要領では、「グローバル化」「知識基盤社会」に対応できる人材の育成のために、ゆとりでも詰め込みでもなく、知識、道徳、体力のバランスがとれた力である「生きる力」の育成が目指された。学習内容の見直しによる主要教科の授業時数の増加、小学校外国語活動の新設などとともに、教育基本法の改正に伴い「伝統と文化を尊重」「我が国と郷土を愛する」に対応した教育内容が盛り込まれた。

2020年から実施予定の新学習指導要領でもこの路線は維持され、「社会に開かれた教育課程」の創造が謳われ、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の導入や小中学校での「特別の教科 道徳」や小学校高学年での教科「外国語」の設置、プログラミング教育の充実などが目指されている。学習の基盤としての「情報活用能力」も重視され、ICT環境の整備も進められている。

2010年代は、東日本大震災に伴って防災教育の重要性が指摘されたり、2011年10月、滋賀県大津市で起きた中2男子の自殺に端を発し、いじめに対する取り組みが強化されたり、情報モラルの必要性が叫ばれたり、新たな教育課題が次々と現れている。

こうした課題に向き合わなければならない教員の多忙さが指摘されるとともに、世代交代により教員の若年化が進む中、新たな学校放送番組像が求められている。

Ⅳ-2 放送のデジタル化とネット連動

2000年12月1日にBSデジタル放送，2003年12月1日に地上デジタル放送がスタート。放送のデジタル化が始まった。デジタル化により、「テレビ」は放送波を受信するだけの機器ではなく，パソコンなどの外部機器と接続し，インターネット端末としても利用できるものに変貌していく。また2006年開始の「ワンセグ放送」は，携帯電話やパソコンで受信できる機種も登場して，放送と通信の融合が進む。

デジタルテレビには，2003年から双方向データ放送のためのネットワーク接続機能が搭載された。テレビは放送番組を視聴するだけでなく，通信経由でインターネットのコンテンツを見ることができるようになったのである。2004年4月には「NHKデータオンライン」が始まり，学校放送理科番組に関連したクイズやゲームなどのコンテンツも，リモコンを操作してテレビで利用できるようになった。

2013年9月からはインターネットで使用されているHTML5を使用して，高画質な画像やアニメーションなどの大量の情報を放送と同じ品質で表示するハイブリッドキャストがスタート，ニュースや大河ドラマ，朝ドラと並んで，学校放送番組では『おはなしのくに』が，「テレビで楽しむ絵本」として，物語の文章・イラストとともに読み聞かせができるコンテンツとして公開されている。

2018年4月からは，高臨場感・高質感のスーパーハイビジョン（4K・8K）の放送が始まり，小学校の授業で利用する効果研究なども行われている⁴³⁾。

放送番組を補完するNHKのインターネットサービスは，1995年10月に『NHKオンライン』が公開されて以降，順次サービスを拡大している。学

校放送番組のインターネットサービスは，1996年に『ためしてガッテン』『週刊こどもニュース』などの番組サイトと並んで，ポータルサイト「学校放送オンライン」としてオープン，『たったひとつの地球』（小学校高学年・環境教育）などの番組関連情報が公開された。

一方でデジタル放送は，それまでのアナログテレビでは受信できない。そのため，学校のテレビのデジタル化も総務省や文部科学省の主導のもと進められていった。

2005年度の文部科学省委託事業「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業」では，デジタルテレビの教育的機能として，「高画質・高音質」「データ放送・自動蓄積」「双方向性」「自作情報との組み合わせ」の4点が挙げられ，全国6地域20校で実践研究が行われた。

また，過去の放送番組をアーカイブとしてインターネットで公開する動きも，NHK全体として進められた。過去の放送番組の公開については議論の結果，学校放送番組や福祉番組の一部は受信料事業としてNHKのウェブサイトで公開，それ以外の番組は2008年12月開始の有料サービスであるNHKオンデマンドで行うこととなった。

こうした流れの中，2001年にウェブサイト「学校放送オンライン」は「NHKデジタル教材」へ発展，さらに2011年にはNHKの学校向けサービスのポータルサイト「NHK for School」となり，放送が終わった番組や，番組関連の動画クリップをインターネットでいつでも視聴できるようになっていった。

IV-3 放送回数、番組時間数の柔軟化

2000年代からの学校放送番組の編成の特徴は、全体としての放送時間は減少していく中、多様化する教育課題に応えるため、また生利用、録画利用、そしてインターネットサービス利用と多様化する利用形態に合わせて柔軟に対応していることといえる。

2001年からの「NHKデジタル教材」公開、2011年からのウェブサイト「NHK for School」の内容と合わせて、この時期の番組編成の特徴を2011年度の番組時刻表(表13)をもとに整理する。

1点目は1990年代まで年間15分×20本が基本だった小学校向け学校放送番組を、原則として10分×20本として、一部の教科については半年で10分×10本、あるいは10分×5本などに多様化したことである。

これは、小学校高学年を中心に各教科で教える内容が増えていることや、教師の一斉指導だけでなく、児童の話し合いなど協働する場面の必要性が増えてきたことがあり、45分の授業の中で15分の番組よりも短い映像に対するニーズが高まってきたという背景がある。2011年度の学習指導要領の改訂を機に順次、新番組の10分化が進められている。

2点目は、番組編成をわかりやすく、録画利用をしやすくしたことである。生視聴が多い小学校低学年向け番組は9時台にまとめ、録画視聴が増えてきた中高学年向け番組は曜日ごとに同教科の番組を集める編成とした。また中学・高校向け番組は、録画しやすい早朝や深夜の時間帯に教科ごとにまとめて編成している。

3点目は番組シリーズ数の増加である。番組の10分化と、半年10本編成の番組が増えたこと

や、夏季・冬季・春季の長期休暇中の特別編成などで、学校放送番組の総シリーズ数を増やすことができるようになったのである。その結果、2011年度以後、これまであまり番組化されてこなかった音楽、図工、家庭科、体育などの実技教科や、総合的な学習の時間や特別活動向けのさまざまな番組が放送できるようになった。

この背景には、学校のメディア環境の整備が進み、普通教室だけでなく、家庭科室や体育館などにもデジタルテレビやインターネット環境が整備されたこと、理科や社会科で番組の利用効果を実感した教師から、実技教科番組の拡充が求められたことがある。

インターネットでは、放送が終了した番組も条件を整えば公開することは可能である。例えば、2011年度には、理科の新番組として『ふしぎがいっぱい』シリーズ3～6年の放送が始まったが、前シリーズである『ふしぎだいすき』(3年)、『ふしぎ大調査』(4年)、『ふしぎワールド』(5年)、『ふしぎ情報局』(6年)もインターネットでの公開を続けた。この2シリーズは番組スタイルが複数のコーナーで構成される「セグメント型」と1つのストーリーで進む「ストーリー型」で大きく異なるので、教師は目的に合わせて2つのシリーズを選択して視聴することが可能になり、結果として利用率の増大にもつながっている。

2018年度現在、放送またはインターネットで公開している学校放送番組のシリーズ数は60を超えて過去最多となり、小学校に関してはほぼすべての教科、理科・社会についてはほぼすべての単元をカバーし、さらに、メディア・リテラシー、情報モラル、いじめ、防災、プログラミング教育など多種多様な番組が視聴可能となった。

表13 2011年4月 教育テレビ学校放送番組時刻表

小学校向け

曜日 時間	月	火	水	木	金
9 15 25 30 35 40 45 50 55	おはなしのくに (1～3年国語)	できたできたできた (1年特別活動)	ざわざわ森の がんこちゃん (1・2年道徳)	(再) できたできた できた (1年特別活動)	(再) ざわざわ森の がんこちゃん (1・2年道徳)
	ひょうたんから コトバ (3～6年国語)	ふしぎがいっぱい3年 (3年理科)	見えるぞ!ニッポン (3・4年社会科)	(再) プレキン英語 (5・6年外国語)	ストレッチマン・ハイパー (特別支援教育)
	わかる国語 読み書きのツボ5・6年 (5・6年国語)	ふしぎがいっぱい4年 (4年理科)	知っトク地図帳 (3・4年社会科)	えいごルーキー GABBY (5・6年外国語)	時々迷々 (3・4年道徳)
		ふしぎがいっぱい5年 (5年理科)			
	マテマティカ2 (4～6年算数)	ふしぎがいっぱい6年 (6年理科)	どきどきこどもふどき (3～6年社会科・総合)	ど～する?地球のあした (4～6年総合)	道徳ドキュメント (5・6年道徳)
	10 0 5 10	コミ☆トレ (特別支援教育)	大科学実験 (理科)	社会のトビラ (5年社会科)	伝える極意 (5・6年総合)
(再) プレキン英語 (5・6年外国語)			見える歴史 (6年社会科)	(前期) ホットスポット 最後の楽園 (後期) ミクロワールド	
15					

注：プレキン英語の初回放送は土曜日午後6:50～7:00

学校放送
ライブラリー
土曜日 1:05～1:45

中学・高校向け（前期・後期制）

曜日 時間	火	水	木	金
5 0 5 10	10min. ボックス			
	理科1	情報・メディア	日本史	生活指導
	理科2	理科3	日本史	職業ガイダンス
10				

■ウェブサイトのみで公開の学校放送番組

小学校向け	理科3年 ふしぎだいすき	中学・高校向け	10min. ボックス 現代文
	理科4年 ふしぎ大調査		10min. ボックス 古文・漢文
	理科5年 ふしぎワールド		
	理科6年 ふしぎ情報局		
	日本とことん見聞録 (5年社会科)		

注：「平成23年度 NHK学校放送テキスト」と「NHK年鑑」をもとに作成

IV-4 「オープンエンド」 「セグメント」の進展

1999年12月に文部省はミレニアム・プロジェクト「教育の情報化」を打ち出し、2001年度までにすべての公立小中高등학교などがインターネットに接続でき、すべての公立学校教員がコンピュータの活用能力を身につけられるようにするという施策を掲げた。

NHKも2000年度から6か年計画で放送番組と連動したインターネット教材、「NHKデジタル教材」の開発を始めた。放送を使った「1対マスの教育」に加え、デジタル教材による「1対1の教育」によって、個々の子どもたちの興味・関心に対応した教材を創り出すことをねらったのである。強いストーリー性で動機づけをし、直接体験することが難しいことを間接体験させ、それを教室で共有するという放送教育の方法論と、マルチメディアを使って個々の子どもたちが自由に探索していく構成主義の方法論の最適な組み合わせを考えたのである⁴⁴⁾。

以下、2000年代の番組について、「NHKデジタル教材」誕生の背景をみたらうえて、番組の最後に疑問を投げかける「オープンエンド」形式や、独立した情報を束ねた「セグメント」形式など、インターネット展開も考えた番組制作、メディア・リテラシーやいじめなどの喫緊の課題に対応した番組制作、そしてタブレット端末やアプリなどへの展開をみる。

「NHK デジタル教材」の誕生

デジタル教材のプロトタイプは、2000年のNHKスペシャル『映像詩 里山』を素材にしたものから始まる。番組の各シーンに関連するクリップ映像やインターネット教材（学習ゲームや図鑑）が用意され、データ放送で送られるリン

クから呼び出す設計になっていた。

教材の操作は、画面上部の5色のタブで画面を切り替えるようにデザインされた。「テレビでしらべる」「データベースでしらべる」「インターネットでしらべる」の3つの画面では、それぞれテレビ番組、クリップ映像、インターネット教材を見ることができた。それをもとに「はなしあう」という画面で掲示板による交流学习をして、その成果を「まとめてつたえる」という画面で発表する流れになっていた。

このプロトタイプをもとに、最初のNHKデジタル教材『おこめ』（小学5・6年総合的な学習の時間）の開発が始まり、2001年4月から『にんげん日本史』（小学6年社会科）とともに公開された。当初は5画面で構成されたが、2005年度から「ばんぐみ（テレビ）」「クリップ」「きょうざい（ホームページ）」「けいじばん」の4つに集約される。4つの画面には、将来的にデジタルテレビ上で操作できることも考え、リモコンの4色ボタンの青・赤・緑・黄色が割り当てられた。

「ばんぐみ」の画面では放送番組がインターネットで見られるだけでなく、番組のシーンごとに部分視聴することもできる。また「あらすじ」で、番組概要を俯瞰することもできるように設計された。

「クリップ」は、資料映像を1～3分に編集した映像の百科事典である。『おこめ』では、国内外の稲作作業や発芽などの科学映像、さまざまな田んぼの生き物や米の調理法など、約200のクリップ映像が2001年度当初に用意された。

こうしたクリップは子どもたちからの質問に短い映像で答える特集番組『きみもアクセス! デジタル不思議ボックス』（1999～2002年）で制作され、さらに2004年度からは、クリップ映像を並べて紹介する番組『学校デジタルライブラリー』を深夜に放送し、放送録画利用に応えな

がら、時代状況に合わなくなったり、権利処理が難しくなったりした映像・音声を入れ替えてクリップ映像をメンテナンスする方法がとられた。

「きょうざい」は、番組に対応するインターネット教材である。子ども向けの学習ゲームやクイズ、実験方法や統計などの番組関連情報、用語・リンク集・Q&Aなど、教師向けには、番組のあらすじ、利用案、印刷して配付できるワークシートなどである。

「けいじばん」は、交流学习のためのページである。各回の番組内容を話し合う「ばんぐみ」についてはなす、深めたいテーマを決めて話し合う「かいぎしつ」、各学校の調べ学習の成果を公開できる「はっぴょうしょう」の3つが用意された。子どもたちが安心して交流できるように、教師があらかじめ登録した学校だけがパスワードで書き込みできるようになっており、さらに、研究者などで交流サポートを行った。

途中からは先生向け掲示板も追加された。番組の利用方法の意見交換をする「授業でこんな風に使うと…」、ほかの教科と組み合わせて使う方法を交換する「組み合わせて使うと…」、大学の研究者やほかの先生からアドバイスがもらえる「質問箱」、各種研究会・公開授業の情報を得られる「お役立ち情報」が用意された。

『おこめ』の番組制作にあたっては、番組制作のディレクター、クリップ制作のディレクター、ウェブ教材を制作するデザイナー、交流ページを運営するファシリテーターが毎週定期的に集まり、番組の構成内容と合わせて、必要なクリップやインターネット教材について議論を進め、あわせて学校現場にも足を運び、放送番組とデジタル教材全体の設計をチーム一体となって進める、それまででない制作体制をとった。

こうしたNHKデジタル教材の展開は文部科学省や研究者で構成される「双方向教育推進協

力者会議」(2002年度)からの提言もあり、他の学校放送番組のウェブサイトも順次、「ばんぐみ」「クリップ」「きょうざい」「けいじばん」の4つの画面をもつデジタル教材とされていった。

特に「けいじばん」は、『おこめ』のほかに、総合学習番組『インターネットスクール・たったひとつの地球』、『川』、『南極』、理科番組『ふしぎいっぱい』(小学校3年)、『びっくりか』(小学校4年)、道徳番組『さわやか3組』(小学校中学年)、『虹色定期便』(小学校高学年)で設けられ、それぞれ10校程度の小学校が研究校として交流学习を進めるとともに、一般参加の小学校も加わった。

しかし、「けいじばん」は、学校間交流を推進する教師の間では熱心に活用された一方、利用者が増えるにつれて研究者による交流の指導やメンテナンスが想像以上に負荷となっていった。また、個人情報保護やネットトラブル対策に関連した学校側の掲示板利用制限もあり、2006年度からは「けいじばん」に代わり「先生」という、指導案やワークシートなどの教師向けコンテンツを提供する画面とした。そして教師向けの交流の場としては、2006年度から始まったNHKの会員制サイト「NHKオンラインメンバーズ」の「NHKティーチャーズネット」に引き継が

NHKデジタル教材画面(2002年度)



れ2009年度まで継続した。

その後、番組ウェブサイトは2011年にNHK for Schoolとしてオープンする際にデザインを変更したが、基本構造は変わらず、番組ごとに「ばんぐみ」「クリップ」「きょうざい」「先生向け」の4つの要素で構成されている。

インターネット展開を考えた番組制作

放送番組と合わせてインターネット上のコンテンツも授業で利用できることになると、番組の演出も再考されるようになった。2000年代になると多様なタイプの番組が登場する。

2005年度から始まる小学校向け理科番組の「ふしぎ」シリーズは、「セグメント」型番組として設計された。各番組は3～5本のクリップと、クリップをつなぐCGキャラクターのシーンで構成され、独立性の高いそれぞれのクリップだけでも授業で利用できることが目指された。

クリップが数多くインターネットで見られるようになると、「ストーリー型」の番組に回帰する傾向もみられた。2011年度から放送の小学校向け理科番組「ふしぎがいっぱい」シリーズは、実験や観察を自ら体験するお兄さん・お姉さんが登場する点は1990年代の番組と似ているが、番組の中ですべての疑問は解決せず、最後に疑問を残す「オープンエンド」形式の番組として制作された。

番組は主に単元の導入として、子どもたちの意欲・関心を高める役割と位置づけ、動画クリップは、子どもたちが実験・観察をする際の実験手順を確認したり、他の事例を調べるなどして知識・理解を定着させる役割として位置づけ、番組とクリップを組み合わせて授業で利用することを考えた。また、こうした番組とクリップの位置づけをもとにした授業利用案もウェブサイトの「先生向け」欄に公開した。

社会科番組は、中心をストーリー型にしつつ、セグメント的にミニコーナーも設ける演出が、『見えるぞ!ニッポン』(小学校3・4年向け)や『知ってク地図帳』(小学校3年向け)などで行われた。前者では日本の県名と県の形についてのミニコーナー、後者では地図記号のミニコーナーがクリップとして公開され、47都道府県のクリップ集、地図記号のクリップ集としても活用できるようにされた。

こうしたクリップは理科、社会を中心に、総合的な学習の時間向け番組や、音楽、図工、家庭科、体育などの実技科目の番組で主に制作されている。

道徳番組は特性上、理科、社会のような知識定着をねらったクリップは必要ないが、価値葛藤の場面をわかりやすくするために、長めのセグメントを組み合わせ、かつ、最後がオープンエンドとなるような番組の演出が行われるようになった。

高学年向け『道徳ドキュメント』や『ココロ部!』では、ドキュメンタリーやドラマだけで全体を構成せず、振り返りを行うスタジオシーンを入れることで、途中で考えたり意見交換をしたりしてから最後まで見ることも考えた演出手法をとっている。

一方で1996年から放送が続いている低学年向け道徳番組『ざわざわ森のがんこちゃん』は、15分から10分に時間が短くなっても、ストーリー性を重視した演出を変えていない。対象学年や内容によってスタイルを選択しているのである。

喫緊の課題に対応した番組制作

2000年代の学校放送番組の特徴の一つとして、総合学習番組、特別活動番組の増加が挙げられる。2018年度現在、ウェブサイトNHK for Schoolの番組数をカテゴリー別にみると、

理科20, 総合13, 社会11, 国語9, 特活9となっている。

従来の教科の枠には入らないが、子どもたちに必要な課題を番組として提示することは、教科書などの印刷メディアにはない、速報性のある放送メディアとしての特性を生かした試みであるといえる。1980年代から放送されてきた『にんげん家族』などの総合学習番組、『たったひとつの地球』などの環境教育番組の流れのもと、さまざまな時代の課題に対応した番組が制作されてきた。

特に次のようなメディア関連の番組が数多く制作された。

『しらべてまとめて伝えよう～メディア入門～』(2000～04年度, 小学校3・4年対象, 15分), 『体験!メディアのABC』(2001～03年度, 小学校高学年対象, 15分), 『ティーンズTV メディアを学ぼう』(2005～06年度, 中学校対象, 20分), 『10min.ボックス 情報・メディア』(2007～13年度, 中学・高校対象, 10分), 『伝える極意』(2008～12年度, 小学校5・6年対象, 15分), 『メディアのめ』(2012年度～, 小学校4～6年・中学校対象, 10分), 『メディアタイムズ』(2017年度～, 小学校4～6年・中学校対象, 10分)

こうしたメディア関連の番組が多いのは、放送局として子どもたちにメディアについて知ってもらうことが重要視されてきたことや、ディレクターがふだん自分たちがしている活動を番組化しやすいためであると考えられる。

そのほかに、情報モラル関連として『スマホ・リアル・ストーリー』(2014年度～, 小学校4～6年・中学校対象, 10分), 情報活用スキル育成として『しまった!』(2016年度～, 小学校4～6年・中学校対象, 10分)などがある。

また喫緊の課題への対応としては、防災教

育番組『学ぼうBOSAI』(2013年度～, 小学校5・6年・中学校対象, 10分), いじめに対しては『いじめをノックアウト』(2013年度～, 小学校3～6年・中学校対象, 10分)などの番組が制作されている。

さらに哲学番組『Q～こどものための哲学』(2017年度～, 小学校3・4年対象, 10分), 東京オリンピック・パラリンピックを前に日本らしさを考える4K制作の『JAPANGLE』(2017年度～, 小学校4～6年・中学校対象, 10分), 裁判員裁判制度に対応した『昔話法廷』(2015年度～, 小学校5～6年・中学・高校対象, 10分)などが放送されている。

インターネットの時代となり、多種多様な番組が放送できるようになったことで、教育テレビ初期に考えられていた「経験主義」に重点を置く「複数年対象の総合学習番組」があらためてその役割を増し、放送時間が増えてきたといえるであろう。

タブレット端末・アプリへの展開

2010年代後半になると、子どもたちが1人1台タブレット端末等を持つようになることを考え、NHK for School公式アプリや、オリジナルの番組や動画集をつくれるプレイリスト機能などが開発された。

個別の番組としても『キミなら何つくる?』(図工)で作品を投稿できるアプリや、『はりきり体育ノ介』で模範映像と撮影した自分の映像を比較できる「さかあがりお助けアプリ」が開発された。

テレビで見る放送から、パソコンで見るウェブ、そしてタブレットなどで見るアプリへと、番組が多様に展開し始めてきている。

IV-5 情報教育、視聴覚教育と 放送教育

放送教育の機関誌として日本放送教育協会が発行していた雑誌『放送教育』は2000年10月に休刊、すでに1998年に「日本視聴覚・放送教育学会」は「日本教育メディア学会」と名称変更しており、2000年代になると放送教育研究は節目を迎える。

放送教育研究会全国大会も視聴覚教育研究会との合同で開催されることが多くなり、地方の放送教育研究会も視聴覚教育研究会あるいは情報教育研究会と一体化する動きがみられる。

その一方で、番組とデジタルコンテンツを活用した利用研究については、日本教育工学会、全日本教育工学研究協議会全国大会、デジタル教科書学会などで研究発表、実践発表がされるようになる。また、地上デジタル放送開始に伴う文部科学省委託事業などで、あらためて放送番組の果たす役割について研究や実践が進められた。

さらに番組を核としたメディア・ミックス利用が広がった形ともいえる交流学習についての研究や教師コミュニティの形成についての研究も進められた⁴⁵⁾。

放送教育の指導者を養成する講座も2001年度から5年間NHK主催で行われた。放送教育に対する課題に、毎年10名ほどの受講生が年3回の集まりと講座専用の掲示板を利用して活動するものである⁴⁶⁾。その発展形として、2015年度からは日本教育工学会とNHKの共催で「ICT研修ファシリテーター養成講座」も行われている⁴⁷⁾。

以下、2000年代の研究プロジェクトをみていく。

全放連研究プロジェクト

全放連（全国放送研究会連盟）では、1950年の東京大会以降、全国8ブロックで順に全国大会を開催してきたが、1997年の第48回を最後に、原則として公開授業を伴う地方開催を中止して、研究発表を中心とするようになった。

その一方で、2000年代から新しいメディア環境に対応した研究プロジェクトを東京近郊の教師を中心に進め、研究会の開催、報告書の発行等の活動を行っている⁴⁸⁾。

- ・2000～04年度「教育放送番組デジタル化対応プロジェクト」～学校放送番組とデジタルコンテンツを活用した授業研究。
- ・2005～07年度「放送学習による学力向上プロジェクト」～具体的に子どもたちを見取る評価方法の工夫、授業の成果を分析・検証。
- ・2008～10年度「放送学習による人間力育成プロジェクト」～「人間力育成」について、「共感・響感」をキーワードに、人間力を複合的なものととらえ、「知的・能力的要素」「社会・対人関係力的要素」「自己制御的要素」「身体・体力的要素」としてさまざまな番組を活用しながら整理。
- ・2011～13年度「生きる力を培う放送学習プロジェクト」～「習得型・活用法」から「探究型」学力を培う実践に広げられるように、番組の特性を分析するとともに、「探究型」学力を育む「総合的な学習の時間」の単元開発や授業づくりを実施。
- ・2014～16年度「子どもが生き生きと学ぶ放送学習プロジェクト」～放送教育を活用した教育の成果について、具体的に検証するために番組ごとの「番組分析シート」と児童への質問紙からなる、教科ごとの「評

価シート」を活用。

- ・2017～18年度「深い学びの実現に向けた放送学習プロジェクト」～「放送教育の教育的効果を検証する研究」「子供の学習スタイルによる指導の在り方の研究」「スタートカリキュラムに対応した授業づくりと番組についての研究」という柱で、授業実践を整理。

利用研究のテーマをみると、伝統的な放送教育のあり方を引き継ぎつつも、デジタルコンテンツの活用研究や、「学力向上」「生きる力」「深い学び」といった、その時々教育課題に対して学校放送番組をどう利用していけばよいのかといった視点や、個々の学校放送番組についてその内容分析を行い、子どもの学習スタイルと合わせた活用法を探る研究など、より個別具体的な状況のもとでの効果研究を行う方向性がみられる。

デジタル放送教育活用促進協議会

2005年4月に学識経験者、日本視聴覚教育協会、日本放送教育協会、民間放送教育協会などにより、文部科学省の委託を受け、デジタル放送教育活用促進協議会が設立された。2005～07年度には、全国6地域21のモデル校でモデル授業も実施された⁴⁹⁾。

2003年12月に地上デジタル放送が始まり、2011年までにアナログ放送終了とされる中、デジタルテレビを学校で活用するための活用研究である。

この事業でNHKは、コンテンツ提供だけでなく、札幌地区と東京地区(港区、三鷹市)の授業の実践にも深く関わった。同事業では、高画質のハイビジョン番組、地元や身近な地域を描いた放送番組の活用、放送番組に関連する

データ放送、NHKデータオンライン、インターネット上のデータ情報や映像(NHKのデジタル教材など)の活用、地域や学校で独自に撮影・制作したデジカメ映像、デジタルビデオ映像などを大型デジタルテレビ画面上で組み合わせながらの利用、そして放送と学校内LAN(インターネット)のさらなる連携や、映像の蓄積・編集、メタデータの活用などが進められ、その成果は公開授業や3冊の報告書の形で全国に配付され、デジタルテレビ時代の放送教育のあり方を示した。

このプロジェクトで示されたサーバー型放送(蓄積型放送)と呼ばれる、放送された番組と通信で配信された連動コンテンツやメタデータを受信端末(ホームサーバー)に蓄積し、授業で利用する構想は最終的には実現しなかったが、研究の成果はNHKデジタル教材に生かされていった。

先導的教育情報化推進プログラム

デジタルテレビや校内LANの配備など学校の情報環境整備が進む中、テレビ番組(学校放送)、NHKデジタル教材、ICTを活用した授業実践の研究も進められた。

特に、2007～09年度、文部科学省の先導的教育情報化推進プログラムを日本放送教育協会とNHKが受託し、「テレビ番組とICTの連動による探究型学習の効果に関する調査・研究」として研究を進めた。この研究では、テレビ番組、NHKデジタル教材、そのほかのICT機器を、複合的に利用する授業を計画・実施・評価することをねらいとした。

そして、これまでのメディア・ミックスによる授業の理念や枠組みを踏まえ、理科・社会科・総合的な学習の時間の3教科・領域において、番組とデジタル教材を連動させた授業を延べ

32 単元開発し、現代的メディア・ミックスといえる連動授業の役割を整理し、下記の4つの授業モデルを提案している。

【タイプ1】会得型

映像により、活動モデルを習得するモデル。

【タイプ2】熟考型

興味・関心に応じて課題を追求する際に、映像を選択視聴させることで、課題追求の充実をはかり、思考を確実にすることをねらうモデル。

【タイプ3】応用型

映像で子どもの思考を広げ、学んだことをほかの場面で生かすことをねらったモデル。

【タイプ4】発展型

思考をさらに深め、発展的に考えさせるモデル。

それぞれの連動のタイプは異なるが、「テレビ番組の一斉視聴」→「NHK デジタル教材を利用した活用・探究型学習」→「ICT を利用した、まとめる・伝える活動」という流れは共通しており、ねらいによってそれぞれのメディアの位置づけが異なるとまとめている⁵⁰⁾。

NHK for School × タブレット端末活用研究プロジェクト

これまでテレビや大型提示装置を使って、教師が一斉視聴させることが多かったNHK for Schoolを、1人1台端末時代に子どもたちがどう活用していける可能性があるのかを研究するための「NHK for School × タブレット端末活用研究プロジェクト」が、2015年度から始められた。

2015～17年度の3年間に行われた62の実践は、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校で利用できる実践事例集として『タブレット端末を授業に活かすNHK for School実践事例62』としてNHK出版から発行されている。NHK for Schoolのタブレット端末での活用例は以下のよ

うなものである。

- ・社会科番組『未来広告ジャパン!』でグループそれぞれが異なる課題に取り組む際に、教師が事前にプレイリスト機能で視聴するクリップを設定、グループごとにタブレット端末で視聴する。
- ・理科番組『ふしぎがいっぱい4年』で、月の動きについての番組とクリップを教師がプレイリストで作成し、学校だけでなく家で月の観察をする際に視聴する。
- ・体育館でグループごとにタブレット端末のカメラ機能でお互いの演技を撮影したり、『はりきり体育ノ介』の動画クリップを視聴したりする。
- ・タブレット端末で『昔話法廷』を個別に視聴し、「証拠検討表」にメモをしたり、番組の重要シーンをタブレット端末にキャプチャしたりして検察側、弁護側の根拠とする。

1人1台あるいはグループに1台のタブレット端末があることで、個別の課題に対応した映像を教師が事前に選択しておいたり、子どもたちが自分で選択したりする利用が容易になった。またタブレット端末は持ち運びができるので、体育館など教室外で見たり、プレイリスト機能を使って自宅のパソコンで見たりする授業実践も行われている。

また、日常的な番組活用について教師が投稿、意見交換できるウェブサイト「NHKすくレポ!」も2015年度から公開し、特にすぐれた実践は「NHK for Schoolアワード」として表彰を行っている⁵¹⁾。

教師が番組を選択するだけでなく、子どもたちが必要に応じて番組やクリップを選択する授業実践も増えてきている。

IV-6 小括

2000年代以後の学校放送番組は教育テレビでの放送と合わせて、インターネットやアプリに積極的に展開している。こうした時代の特徴について3点を述べたい。

1点目は複雑化、不確実化が進む社会状況の中、喫緊の課題に対応した学校放送番組の制作が増えていることである。学習指導要領は10年に1回、教科書は通常4年で改訂されるが、学校放送番組はより速いスピードで新番組を制作することができる。

近年は番組編成が柔軟化したこともあり、定時番組ではなく3本シリーズ、5本シリーズなどの形で、夏季、冬季、春季の長期休暇中の特別編成で番組を放送やインターネットに展開し、授業利用の報告をもとにさらに番組をブラッシュアップしていく形が可能となり、短いサイクルで子どもたちに必要な番組を制作できるようになった。

ベテラン教師が大量に退職し、若い教師が増加する中、喫緊の課題に対する学習モデルを提示する学校放送番組の重要性は高いと考える。

2点目は10分サイズの番組が増える中、今まで以上に視聴後の活動を意識した番組構成が求められていることである。視聴後に話し合ったり調べたりする「オープンエンド」にするのか、視聴することで知識やスキルが身につくことをねらい「セグメント」にするのか、ねらいに沿った番組構成が必要になってきている。

3点目は、子どもたち1人1人がタブレット端末で番組を選択視聴することが可能になってきており、大型テレビでの一斉視聴とタブレットでの視聴の両方を考えて番組を設計する必要性が高まってきていることである。

NHK初の定時番組のデジタル教材

『おこめ』

放送 2001～08年度 教育テレビ15分



学校放送番組『おこめ』はこめ作りから収穫までの1年間の稲作体験に合わせつつ、1学期は「稲作の実際と自然環境、歴史」、2学期は「米の消費と文化」、3学期は「米が抱えている問題」を意識して、年間15分×20回の番組の基本設計が行われた。その各回の番組テーマをもとに10本程度、合計20回×10本=200本程度のクリップが制作された。並行して、各回の教材としてゲームやクイズ、双方向教材、教師用の番組利用案、ワークシートなども作成された。

番組制作とともに、全国十数校の小学校がテーマごとに交流学习を進めた。番組を利用した授業や交流の様子は特集番組『デジタルでおこめを学んだー仙台市立南小泉小学校5年3組の7か月ー』として、2001年11月17日に44分番組が放送される。

また関連書籍として『「おこめ」で広がる総合的学習』（明治図書）が発刊されるとともに、番組とデジタル教材の開発、教材評価、アクセスログの解析などが論文化されたり学会発表されたりした。

こうした形で通年のプロジェクトとして、教師、研究者、番組制作者が、授業、研究報告、番組制作をしていくシステムは、2000年代のその後の番組制作にも影響を与えている。



考察：61年目からの教育テレビ と学校放送番組に向けて

教育テレビ60年の歴史の中で、初期には最も多い放送時間を占め、後期には放送時間は減少するが、早くからインターネットに展開してきた学校放送番組について、「社会状況・教育政策」「放送技術・メディア環境」「番組編成」「番組内容（構成・演出）」「番組利用・番組研究」の5つの視点で多面的にみてきた。60年の歴史を振り返りながら、今後の方向性を5点にまとめてみる。

1. 学習の個別化への対応

今後の「社会状況・教育政策」を考えるうえで、子どもたちが1人1台、タブレットなどの端末を持ち、学習の個別化が進む時代に、学校放送番組はどう対応していくかが最も重要な課題であると考えられる。学校に録画機器が導入されたことで、教師が必要な時間に必要な映像を見ることが容易になり、放送番組の利用が変化したのと同様に、子どもたち1人1人がタブレット端末で必要な映像を必要なときにどこでも見られる時代には、大きな変化が訪れるであろう。

集団で学ぶ場という学校の形態が変わらないとするならば、「集団で学ぶ時間と個人で学ぶ時間をどう結びつけるのか」「個人が見た映像の履歴を生かして次の学習につなげることは可能なのか」といった検討が必要であろう。

2. 新しい技術の積極的な導入

学校放送番組は限られた対象に向けて制作されている分、新しい技術が生まれたときに、その対象にどのような効果を及ぼすかを検討しやすい特性があると考えられる。

カラー放送やハイビジョン放送、インターネットへの対応など、新しい技術の導入はこれまでも他の番組より早くから進められてきたが、今後の「放送技術・メディア環境」を考えるとスーパーハイビジョンだけでなく、VRやAR、3Dなどの映像の可能性や、アプリの開発など、今後も新しいメディアの教育活用の可能性を探る試みを先進的に行っていく姿勢が大事である。

3. 学年別教科番組と複数学年対象総合学習番組のバランス

学習者の興味・関心から出発する「経験主義」と、教師主体で体系的に知識を学ぶ「系統主義」に関するさまざまな議論が行われてきた。この2つは対立するものではなく、両者のバランスの上に学習が成立するものであろう。

学校放送番組でも、学年別の教科番組と複数学年対象の総合学習番組のバランスを考えた「番組編成」が必要であるといえる。もちろんそのバランスは、時代状況や他の教育メディアの状況によって異なってくる。

近未来の教育メディアを考えると、デジタル教科書の存在は重要である。これまでは紙の教科書と動画の放送番組という明確な違いがあったが、教科書がデジタル化され動画も扱えるようになる中、検定を受ける教科書とは異なり、独自の責任と判断で番組を放送する公共放送として何を教育現場に提供していくのかを、あらためて検討する必要がある。

4. 番組とウェブサイトのトータルな設計

2000年代以後、番組と合わせてウェブサイトを持つことは当然のこととなってきている。特に学校放送番組の場合は、10分や15分の番組が45分や50分の授業の中で使われる際に、どの

ような情報、どのようなコンテンツが必要なのかを考えた「番組内容」の設計が重要である。

番組制作者は、常に教育現場での利用状況を量的にデータで把握するとともに、実際に授業や学習場面を見ることで、トータルに番組とウェブサイトの設計を考える必要があるし、それができる番組制作者の育成体制が必要であると考える。

5. 教師、研究者、制作者の3者での制作体制の有効性

学校放送は最終的には子どもたちに向けた番組である。その前提のうえで、実際に授業をする教師、番組の内容やメディア特性について研究する研究者、そして番組制作者の3者が緊張関係を持ちつつ、協働的に番組制作に関わることの大切さは変わっていない。

こうした3者が関わり合い「番組利用・番組研究」を進めるシステムは、ラジオ学校放送の時代からあり、ラジオに加えてテレビ、テレビに加えてインターネットと新しいメディアが加わる中、先行的な取り組みができたのは、このシステムがうまく機能していたからであると考えられる。

研究者と協働して先行的な番組を試作する。教師が実践する。実践の結果、子どもたちにどのような効果があったのかを、教師、研究者、制作者で確認していく。こうした制作手順の重要性は今後も変わらないと考える。

以上、今後の方向性を5点に絞ってまとめてみたが、未来を考えるためには、歴史を踏まえることの重要性も強く指摘しておきたい。周年単位で過去を振り返り整理することが、次の周年に向けての準備になると考える。

おわりに

本稿は教育テレビ60年の中の学校放送番組の変遷をまとめたものである。

私事になるが、筆者がNHKに入局したのは1989年。採用人数が多かった時代で、初任地は地方局ではなく、東京の番組制作局教育番組センター（学校教育）という幼稚園から高校までの学校放送番組をつくる部署であった。以来30年間、地方局や海外にいた時期も含めて、教育番組、特に学校放送番組の制作に長く関わってきた。

1989年は教育テレビ開局30年の年でもあった。ちょうど教育テレビ開局時から学校放送番組を制作してきた諸先輩が定年を迎える少し前で、「学校放送番組とは何か」「教育テレビとは何か」「公共放送NHKが教育に果たす役割は何か」や「生放送時代の学校放送番組」などについて、折に触れて直接話を聞くことができた。

教育テレビ60年の歴史の中で、特に前半は学校放送番組の占める割合が高く、学校での利用率は小学校で100%近くまで達していた。一方で、録画機器やコンピューターなどの機器が学校に導入される中、学校放送番組はどうすべきかという議論もなされてきた。入局してすぐに、当時のチーフプロデューサーから、「テレビの時代はもう終わるかもしれない。新しいメディアについての取材をするように」と言われ、ニューメディアやハイパーメディアなど、当時のメディア事情を調べ、その後も常に新しいメディアの動向をみてきたことが、その後に放送番組と合わせてデジタルコンテンツを制作するのにとても役立った。と同時に、新しい技術を教育番組に取り入れていくにはどうしたらいいかを考える基礎となったのは、そもそも教育テレビとは何

か、学校放送番組とは何かという歴史から学んだことであった。

30年前に「もう終わるかもしれない」と言われたテレビの時代は、形を変えつつ2010年代の今も続いている。この先の30年間を予想することは難しいが、これまでの番組制作の歴史を知ること、技術の進展を知ること、社会の変

化を知ることにはできる。そのうえで子どもたちに必要なメディアのあり方を考えることが重要であろう。

教育の場で、公共メディアであるNHKが果たせる役割は何か、今後も追求していきたい。

(うじはし ゆうじ)

注：

- 1) 放送法（1950年施行）では、放送番組の種類を「教養番組」「教育番組」「報道番組」「娯楽番組」に区分して、番組の編成にあたっては総合放送を行う放送局には、「教育番組10%以上」「教養番組20%以上」を確保することを条件として定めている。
- 2) 「放送法」に学校放送に関する記述が加わったのは1959年の改正で、現在の放送法の記述は下記のとおりである。
(国内基幹放送等の放送番組の編集等)
第一〇六条
2 基幹放送事業者は、国内基幹放送等の教育番組の編集及び放送に当たっては、その放送の対象とする者が明確で、内容がその者に有益適切であり、組織的かつ継続的であるようにするとともに、その放送の計画及び内容をあらかじめ公衆が知ることができるようにしなければならない。この場合において、当該番組が学校向けのものであるときは、その内容が学校教育に関する法令の定める教育課程の基準に準拠するようにしなければならない。
- 3) 「日本放送協会国内番組基準」（制定 昭和34年7月21日 改正 平成7年9月26日 平成10年5月26日）では、教育番組、学校放送番組について次のように記している。
第2章 各種放送番組の基準
第2項 教育番組
1 放送の対象を明確にし、番組の内容がその対象にとって、有益適切であるようにつとめる。
2 教育効果を高めるため、組織的かつ継続的であるようにする。
3 放送を通じて、教育の機会均等のために努力する。
第3項 学校放送番組

- 1 学校教育の基本方針に基づいて実施し、放送でなくては与えられない学習効果をあげるようにつとめる。
- 2 各学年の生徒の学習態度や心身の発達段階に配慮するように配慮する。
- 3 教師の学習指導法などの改善・向上に寄与するようにつとめる。
- 4 「幼稚園・保育所向け番組」を含む「幼児向け番組」と、全国の通信制高校生の自学自習に役立つことを目的に制作されている『NHK高校講座』については、「教育テレビ60年」についての別稿で扱う予定である。
- 5 学習指導要領は文部科学大臣（文部大臣）の諮問により中央教育審議会が審議、答申を行い、文部科学省告示として公示される。公示から実施までの間に移行措置が行われ、実施も小学校から順に学年進行で行われる。本稿では、小学校の実施年を基準年としている。
- 6 岡倉由三郎（岡倉天心の弟）が講師となった英語講座が1925年7月から始まっている。
- 7 1932年、札幌放送局でも試験的に学校放送が行われた。
- 8 西本三十二（1899-1988）は奈良女高師教授をへて1933年に日本放送協会に入り、教養部長や理事などを務めた。終戦後は国際基督教大学教授や帝塚山学院大学長を務めたほか、1948年に日本放送教育協会を設立して理事長となり、放送教育に大きな影響を与えた。
- 9) 学校放送番組の制作にあたって、教育学者、現場教師、文部省（文部科学省）等の委員が番組制作に関わるシステムは2018年度現在まで継続している。新番組放送前年度の6月に開催の第1回「教育放送企画検討会議」で全体的な方向性を策定、NHKで番組原案を作成のうえ、12月に開催の第2回「教育放送企画検討会議」で審議

- する。並行して各番組単位で「番組委員会」を設置し、現場教師、文部省（文部科学省）、教科に関する専門家等で具体的な内容について検討を重ねている。
- 10) 豊田昭「テレビ学校放送のあゆみ」『教育じほう』1953年10月号
 - 11) 小川一郎「教育テレビの現状と問題点」『視聴覚教育』1953年6月号
 - 12) 『週刊東京』1957年2月2日号での大宅壮一の論評
 - 13) 文部科学省「小学校における各教科等の授業時数等の変遷」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399513.htm
 - 14) NHK放送文化研究所が1950年から2012年まで、全国の幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校（特殊教育諸学校）を対象に実施した調査。ラジオやテレビなどの各種メディアの普及状況や学校放送番組をはじめとする、教育コンテンツの利用実態を調査した。2013年からは、教師を対象とした「教師のメディア利用と意識に関する調査」を実施している。
 - 15) 学校教育法により、心身に障害のある児童・生徒を対象として、その特性や能力に応じて行われる教育。2007年からは「特別支援教育」に改められた。
 - 16) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 p.38
 - 17) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 p.40
 - 18) 地域に根差した問題解決を進めていく「生活カリキュラム」の一つ。
 - 19) 全国放送教育研究会連盟、日本放送教育学会編（1986）『放送教育50年～その歩みと展望』日本放送教育協会 p.100
 - 20) 全国放送教育研究会連盟、日本放送教育学会編（1986）『放送教育50年～その歩みと展望』日本放送教育協会 p.166
 - 21) エドガー・デール（1900-1985）アメリカの教育学者。1946年発行の『学習指導における視聴覚的方法』（Audio-Visual Methods in Teaching）で「経験の円錐」（cone of experience）を示した。
 - 22) ジョン・デューイ（1859-1952）アメリカの哲学者、教育学者。プラグマティズムを大成、進歩主義運動を進めた。
 - 23) ウィリアム・キルパトリック（1871-1965）アメリカの教育学者。デューイの影響を受け、子どもが目的に向かって計画を立てて活動を進めるプロジェクト・メソッドを提唱した。
 - 24) 19世紀後半にヨーロッパやアメリカで、伝統的・形式主義的教育に反対し、新しい教育の建設を企てた教育改革運動。教師・教科書中心の伝統的教育を批判し、児童中心・経験重視を唱えた。
 - 25) 『放送教育』1961年2月号 p.39
 - 26) 2011.3.31にNHK衛星第2テレビジョン（BS2）の放送が終了、2011.4.1からBSプレミアムの放送が始まる。
 - 27) 内閣府「主要耐久消費財等の普及率」
<http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>
 - 28) 時間帯のコンセプト、視聴者像を明確にして同種の番組をまとめて編成する手法
 - 29) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 pp.127-128
 - 30) 阿部和暢「伝統の番組に新しい息吹を一衣がえした小学校理科教室」『放送教育』1985年5月号 pp.32-35
 - 31) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 pp.146-147
 - 32) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 p.155
 - 33) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 pp.176-177
 - 34) 『教室にやってきた未来』は1993年3月20日（土）午後2:00～2:44にNHK総合テレビで放送、書籍化、ビデオ化もされた。
 - 35) 全国放送教育研究会連盟、日本放送教育学会編（1986）『放送教育50年～その歩みと展望』日本放送教育協会 p.230
 - 36) 恒川努（1983）「映像視聴能力の評価に関する研究～「時間」と「空間」の識別能力の発達段階を中心にして～」『名古屋市教育センター研究報告 5708』
 - 37) 水越敏行（1990）『メディアを活かす先生』図書文化
 - 38) 大阪中央放送局（1935）「大阪中央放送局に於ける学校放送の経過」『我国に於ける学校放送の創始』p.3
 - 39) 「NHK杯全国高校放送コンテスト」は、その目的を「現代に生きる高校生の豊かな人間性の育成と、未来への展望をもつ人間としての成長をめざし、校内放送活動をメディアリテラシーの実践として位置づけ、情報発信としての放送活動の発展をはかるために開催しています。」としている。
http://www.nhk-sc.or.jp/kyoiku/ncon/ncon_h/
 - 40) 坂元昂（1986）「メディアリテラシー」『メディア教育のすすめ〈1〉メディア教育を拓く』ぎょうせい
 - 41) 教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』

- 日本放送教育協会 p.151
- 42) Society 5.0 政府広報オンライン
<https://www.gov-online.go.jp/cam/s5/>
- 43) 「超高精細映像の教育利用の可能性」『放送研究と調査』2017年8月号 pp.90-91
- 44) 教育放送研究会 (2012)『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会 p.178
- 45) 稲垣忠, 黒上晴夫, 堀田龍也, 山内祐平 (2002) 「学校間交流学習を促進する教師コミュニティの形成過程: 学校放送番組『インターネットスクール たったひとつの地球』の取り組み」『教育メディア研究』8巻2号 pp.1-15 など
- 46) 木原俊行, 堀田龍也, 箕輪貴, 富永慎一, 嶋崎真紀子 (2001) 「Webを活用した放送教育指導者養成プログラムの開発と運用」『日本教育メディア学会 第8回年会論文』 pp.2-3
- 47) 脇本健弘, 稲垣忠, 寺嶋浩介, 中橋雄, 島田希, 堀田龍也, 坂口真 (2017) 「ICT研修ファシリテーター養成講座の開発と評価」『日本教育工学会論文誌』40巻 Suppl.号 pp.145-148
- 48) プロジェクトの詳細はウェブサイト「放送教育ネットワーク」参照のこと
<http://www.zenporen.jp/backnumber/>
- 49) 平成17年度 文部科学省委託「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業」報告書
http://www.java.or.jp/report/files/h17chidigi_report.pdf
平成19年度 文部科学省委託「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業」報告書
https://java.or.jp/report/files/h19chidigi_report.pdf
- 50) このタイプ分けと事例をまとめたリーフレットは、2009 (平成21) 年9月に発行し、全国の小学校と教育委員会に送付された。
- 51) 「NHK すくレポ!」 www.nhk.or.jp/school/aw/
- 引用・参考文献:**
- 秋山隆志郎 (1985) 「放送教育論の考察～放送教育の特性論を中心に～」『NHK放送文化研究所年報1985』第30集, pp.95-120
- 秋山隆志郎 (1986) 「教育放送研究の動向と考察」『NHK放送文化研究所年報1986』第31集, pp.1-22
- 秋山隆志郎 (1995) 「放送による教育の研究の分析と考察」 (<特集論文>教育メディア研究) 『教育メディア研究』1巻1号 pp.24-37
- 宇治橋祐之 (2019) 「教育テレビ60年 生涯学習波への広がり」とインターネット展開」『放送研究と調査』2019年1月号 pp.2-17
- 大阪中央放送局 (1935) 「大阪中央放送局に於ける学校放送の経過」『我国に於ける学校放送の創始』
- 小笠原喜康 (2012) 「日本教育メディア学会の軌跡1: 放送教育学会『放送教育研究集録』の時代」『教育メディア研究』18巻1-2号 pp.57-68
- 菊江賢治 (2003) 「デジタル時代の放送教育教材の開発: NHK デジタル教材を実例に」 (<特集>放送教育運動の総括から新たな発展のために) 『教育メディア研究』9巻2号 pp.38-43
- 教育放送研究会 (2012)『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会
- 小平さち子 (2014) 「調査60年にみるNHK学校教育向けサービス利用の変容と今後の展望～『学校放送利用状況調査』を中心に～」『NHK放送文化研究所年報2014』第58集, pp.91-169
- 埼玉県放送教育研究開発委員会 (2015) 『なぜ教室にはテレビがあるのか!? 一学ぶ喜びのもてる放送教育-』埼玉県放送教育研究開発委員会
- 佐伯胖, 佐藤学, 荻宿俊文, NHK取材班 (1993) 『教室にやってきた未来』NHK出版
- 佐藤知条 (2015) 「メディア活用の教育方法史における幻燈の位置」『教育方法学研究』40巻 pp.51-62
- 全国放送教育研究会連盟編 (1974) 『放送教育の歩み: 全放連結成25周年記念』全国放送教育研究会連盟
- 全国放送教育研究会連盟編 (2002) 『放送教育の歩み: 全放連結成50周年記念』全国放送教育研究会連盟
- 全国放送教育研究会連盟, 日本放送教育学会編 (1971) 『放送教育大事典』日本放送教育協会
- 全国放送教育研究会連盟, 日本放送教育学会編 (1986) 『放送教育50年～その歩みと展望』日本放送教育協会
- 多田俊文 (1965) 「教育番組研究の展望と提案」『NHK放送文化研究所年報1965』第10集 pp.180-202
- 田口真奈 (1998) 「構造に着目した放送番組の分析研究: NHK理科番組を事例として」『教育メディア研

- 究』5巻1号 pp.51-63
- 中川一史他監修(2018)『「タブレット端末を授業に活かすNHK for School実践事例62」』NHK出版
- 中野照海(1995)「教育メディア研究のめざすもの」(<特集論文>教育メディア研究)『教育メディア研究』1巻1号 pp.1-7
- 中野照海(1996a)「特別企画 日本視聴覚教育学会の歩み その1:視聴覚教育研究協議会の時代」『教育メディア研究』2巻2号 pp.43-51
- 中野照海(1996b)「日本視聴覚教育学会の歩み その2:学会の発足から15年間」『教育メディア研究』3巻1号 pp.12-20
- 中野照海(1998)「日本視聴覚教育学会の歩み その3:学会の発足から日本放送教育学会との合併に至る期間の後半期」『教育メディア研究』4巻2号 pp.33-43
- 西本三十二訳(1957)『デールの視聴覚教育』日本放送教育協会
- 西本三十二(1960)『テレビ教育論』日本放送教育協会
- 西本三十二(1966)『教育の近代化と放送教育』日本放送出版協会
- 日本児童教育振興財団編(2016)『学校教育の戦後70年史』小学館
- 日本放送協会編(1977)『放送50年史』日本放送出版協会
- 日本放送協会編(2001)『20世紀放送史』日本放送出版協会
- 日本放送協会編(各年度)『NHK年鑑』NHK出版
- 日本放送協会放送文化研究所(2015)『放送メディア研究 12<特集・多様化する子どもの学習環境と教育メディア>』丸善出版
- 日本放送協会総合放送文化研究所編(1966)『放送教育の研究と理論』日本放送出版協会
- 日本放送教育協会(1980)『道徳指導と放送—道徳的実践力を育てるために—』放送教育叢書4 日本放送教育協会
- 日本放送教育協会(1981)『社会科と放送—社会認識の広がりと深まりをめざして—』放送教育叢書5 日本放送教育協会
- 日本放送教育協会(1981)『理科と放送—自ら学ぶ力・豊かな創造性を育てる—』放送教育叢書6 日本放送教育協会
- 日本放送教育協会(2013)『日本放送教育協会60年の歩み』日本放送教育協会
- 古田尚輝(1999)「教育テレビ40年 学校教育番組の変遷 その1 学校放送番組」『放送研究と調査』1999年7月号 pp.42-65
- 古田尚輝(2001)「ラジオ第2放送70年 編成の分析—教育放送への道のり—」『放送研究と調査』2001年10月号 pp.2-27
- 古田尚輝(2009)「教育テレビ放送の50年」『NHK放送文化研究所年報2009』第53集 pp.175-210
- 堀江固功・浅野孝夫編(1998)『教育メディアの原理と方法』日本放送教育協会
- 水越敏行編(1986)『NEW放送教育—メディア・ミックスと新しい評価—』放送教育叢書14 日本放送教育協会
- 水越敏行(1990)『メディアを活かす先生』図書文化
- 水越敏行(1995)「教育メディア研究の現状と今後の課題」(<特集論文>教育メディア研究)『教育メディア研究』1巻1号 pp.8-23
- 水越敏行編著(2002)『「おこめ」で広がる総合学習: NHKデジタル教材の活用』明治図書出版
- 三宅貴久子を語る会編著(2016)『三宅貴久子という教師』さくら社
- 文部省(1966)『学校放送の利用』光風出版
- 文部省(1992)『学制百二十年史』(ぎょうせい)
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm
- その他
- ・『放送教育』(日本放送教育協会, 1949年~2000年)
 - ・『視聴覚教育』(日本視聴覚教育協会/旧・日本映画教育協会, 1951年~)等の月刊専門誌
 - ・全国放送教育研究会連盟の年次大会資料他
 - ・NHK学校放送テキスト(NHK出版), NHK学校放送担当部門発行の各種資料やウェブサイト上の情報
- 参考ウェブサイト
- ・NHK for School
<http://www.nhk.or.jp/school/>
 - ・NHKオンラインヒストリー
<http://www.nhk.or.jp/toppage/history/>
 - ・NHKクロニクル 番組表ヒストリー
<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/>
 - ・NHK放送技術研究所『テレビは進化する—日本放送技術発達小史』(2010改訂版)
<https://www.nhk.or.jp/str1/aboutstr1/evolution-of-tv/>

付表 教育テレビ学校向け教育番組年表（幼稚園・保育所向け、および高校講座は除く）

古田尚輝（1999）「教育テレビ40年 学校教育番組の変遷（その1）学校放送番組」『放送研究と調査』49（7），pp.42～65

教育放送研究会（2012）『教育放送75年の軌跡』日本放送教育協会，各年度の『学校放送テキスト』『NHK年鑑』『NHKクロニクル』をもとに作成

年度	1960																		1970										1980							
	1953	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84				
理科				はてなはてな					理科教室小学校1年生 なんなんなあに																											
									理科教室小学校2年生 はてなはてな																											
	工夫と かんさつ			かんさつ ノート		理科教室小学校3年生 かんさつノート																														
																			理科教室小学校4年生																	
																			理科教室小学校5年生																	
																			理科教室小学校6年生																	
				ぼくらの実験室																																
社会科																			テレビ 見学		うちのひとがっこうのひと															
																			はたらくおじさん										みんな のしごと							
																			良太の村					ひらけゆく町		ぼくらの社会科ノート			ぼくのま ちわたし のまち							
																			わたしたちのくらし																	
																			テレビの旅																	
																		くらしの歴史																		
道徳				ぼく ちゃん		びっ りく ん		大きくなる子																												
																			みんななかよし																	
																			明るいなかま																	
国語	おとぎのへや					おとぎのへや																														
				テレビ図書館																																
																		書きくけこくご				なにぬね ノート														

1990									2000									2010															
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18
				なんなん なあに													マイクロワールド																
				はてな はてな													大科学実験																
				しぜんだ いすき				はてなでスタート				ふしぎのたまご				ふしぎ いっぱい				ふしぎだいすき				ふしぎがいっぱい 3年				①					
				はてなをさがそう				ふしぎ コロンブス				ふしぎ 研究所				びっくりか				ふしぎ大調査				ふしぎがいっぱい 4年				②					
				はてなにタックル				わくわくサイエンス				サイエンス・ ゴーゴー				ふしぎワールド				ふしぎがいっぱい 5年				③									
				はてなサイエンス				しらべてサイエンス				3つのとびら				ふしぎ情報局				ふしぎがいっぱい 6年				④									
															考えるカラス																		
															カガクノミカタ																		
それいけノンタック																																	
はたらくひとたち																		どきどきこども ふどき															
たんけんぼくのまち				このまちだいすき				まちへとびだそう				しらべてゴー				“見える ぞニッ ポン”				知っく地図帳				⑤									
				くらし発見				くらし探偵団																		⑥							
レポートにつぼん				ジャパン& ワールド				なぜなぜ日本				日本とことん見聞録				社会のトビラ				未来広告 ジャパン!													
歴史みつけた				歴史たんけん				にんげん日本史				見える歴史				歴史にドキリ																	
のびのびノンちゃん				ざわざわ森のがんこちゃん														⑦															
あつまれじゃんけんぽん				バケルノ小学校 ヒュードロ組				銀河銭湯パンタくん																									
さわやか3組				時々迷々																													
あしたへジャンプ				きつ と明 日は				虹色定期便				道徳ドキュメント				ココロ部!																	
はばたけ6年																オン・マイ・ ウェイ!																	
								ことばあ								ことばドリル																	
あいうえお																		おはなしのくにクラシック															
ことばのくに				おはなしのくに																													
								読み書きのツボ 3・4年				ひょうたんからコトバ																					
				わかる国語 だいすきな 20冊				わかる国語 読み書きのツボ5・6年								お伝と伝じろう																	

付表番組の注

2018年度	小学校	理科	① ふしぎエンドレス 理科3年
			② ふしぎエンドレス 理科4年
			③ ふしぎエンドレス 理科5年
			④ ふしぎエンドレス 理科6年
		社会	⑤ コノマチ☆リサーチ
			⑥ よろしく!ファンファン
		道徳	⑦ 新・ざわざわ森のがんこちゃん

1990										2000										2010														
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
										さんすうみつけた															さんすう犬ワン									
さんすうすいすい										マテマティカ					かんじるさんすう 1・2・3																			
										たのしい 算数										わかる算数 4年生					マテマティカ2					さんすう刑事ゼロ				
																				わかる算数 5年生														
																				わかる算数 6年生														
みんなでアタック					とびだせ たんけんたい					キッズ チャレンジ					それゆけこどもたい																			
										あしたもげんきくん																								
										まちかど・レミ					ドレミノテレビ																			
															トウトウアン サンプル					歌え リコーダー														
ゆかいなコンサート																																		
																														キミなら何つくる？				
										はりきって 体育																				はりきり体育ノ介				
																														カテイカ				
みんな地球人					いのち輝け地球					たったひとつの地球					どーする地球の あした					げんばるマン					ドスルコ スル									
										おこめ																								
										川					南極					学ぼうBOSAI														
にんげん家族										みんな生きている																								
										世界が ともだち					地球たべも の大百科					基礎英語0 ～世界エイゴミッション～					えいごで がんこちゃん									
																				えいごリアン3					エイゴ ビート									
										えいごリアン					えいごルーキーG ABBY																			
										スーパーえいごリアン					えいごでしゃ べらナイト Jr.					プレキソ英語														
										しらべてまとめて伝え よう					伝える極意					しまった!														
										体験メデ アのABC										メディアのめ メディア タイムズ														
																				カラフル!														
																				できた できた できた					でーきた									
																				いじめをノックアウト														
あんぜんバトロール																																		

		1960																		1970										1980														
年度		1953	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84											
特別支援																				たのしいきょうしつ(低学年版)																								
																				たのしいきょうしつ(高学年版)																								
理科	科学ノート																			理科教室中学校1年生																								
																				理科教室中学校2年生																								
																				理科教室中学校3年生																								
社会	世界と日本																			日本の地理・世界の地理										日本新地図														
																				日本の歴史										わたしたちの歴史					わたしたちの歴史1年									
																				わたしたちの社会										わたしたちの歴史					わたしたちの歴史2年									
																														あすの市民														
英語	英語教室																			英語教室中学校1年生					テレビ英語教室中学校1年生					A Step to English					Look and Learn									
																				英語教室中学校2年生					テレビ英語教室中学校2年生					Let's Enjoy English										Let's Try				
																				英語教室中学校3年生					テレビ英語教室中学校3年生					English for You														
数学																														中学生の数学														
美術・音楽																				芸術の窓																								
技術・家庭						職業と家庭		技術と生活														技術・家庭																						
体育																				保健体育					体育のしおり																			
特別活動	職場をたずねて																													特別シリーズ														
																				わたしたちの進路					わたしたちの学級活動					中学生の広場										中学時代				
		1960																		1970										1980														
年度		1953	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84											
中学校・高等学校向け																				美術の世界																								
																				音楽の世界																								
																														Watch and Listen														

1990									2000									2010															
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18
									ゲルゲルパッケン			ストレッチマン			ストレッチマン2						ストレッチマンハイパー			ストレッチマンV			⑧						
いってみようやってみよう															みてハッスル きいてハッスル			コミ☆トレ		スマイル!			⑨										

1990									2000									2010															
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18
特別シリーズ				おもいっきり 中学時代				心の メッセージ				マイライフ																					

1990									2000									2010															
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ステップ&ジャンプ									スクール 五輪の書																								
中学・ 高校 アワー		ゲリーさんの 英語レッスン				アクセスJ																											
		ワールド ウォッチング		10min. コンピューター		サイエンス ボックス		古典 ボックス																									
		コンピューター ターナウ		10min. コンピューター		地球と 生きる																											
		サイエンス ボックス		数学 ボックス		古典 ボックス																											
											10min.ボックス																						

ティーンズ ネット ワーク	ハイス クール 電脳俱 楽部
---------------------	-------------------------



付表番組の注

2018年度	⑧	ストレッチマン・ゴールド
特別支援	⑨	u&i
中学	⑩	アクティブ10 公民

